
触手モノ

密林系紳士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

触手モノ

【Nコード】

N4130X

【作者名】

密林系紳士

【あらすじ】

気がついたら異世界。でも主人公は旅立ちません。だって触手だから。様々な陰謀や魔法、力が渦巻く異世界。でも主人公は関わりません。だって触手だから。見たことも無いような不思議な人や物が溢れた異世界。でも主人公は彼等に避けられます。だって触手だから。これは、触手に転生したアレな主人公の、日常をつづっただけの物語。

1話 転生しました

一日目

絶望には底が無いって聞いたことがあるけど、どうなんだろう、この状況。

何年か前に魔法使いにクラスチェンジしたときのショックのレベルじゃねえぞ、コレ。

ため息をついて、薄暗い洞窟の中で立ち上がる。

視界が高くなったから、多分立ち上がったはず・・・なんだけど、あんま自信が無い。

それは何故か？

「うわッ！モンスターだ！」

ああ、いいタイミングでなんか金髪のヒトが。そうです、私がモンスターです。

とか言ってる場合じゃないな。落ち着け落ち着け。

「p h ん じ え あ q j h」「ば j @ お え h じ え あ！」

うえ？

なんぞコレ？耳とか目は今までどつりだったから、勇気をもって数年ぶりに他人に話かけてみたのに、出てきたのは奇妙なうなり声。

これじゃ、威嚇されてるとしか………、あ、さっきのヒトが逃げていく。

ですよー！。

腕の一本を持ち上げ、頭をかこうとするが、そもそも自分の頭が何処にあるのかも判らない。

ため息をつくとき、洞窟から出て行くのは諦めた。

元々他人と話すのは苦手だし、話しかけても逃げられるんじゃ、精神的ダメージが溜まるだけだ。

それに、適度に湿った洞窟は案外居心地がいい。腹が減ったら壁の表面に生えているコケを食べれば、すぐに満腹になった。人間だったときなら、確実に出来なかった食事だが、不思議と忌避感はない。精神が肉体に引っ張られているのだろうか。

一心地つくと、またため息が出た。

皆さんは転生という事象をご存知だろうか。死んだ人間がそれまでとは別な生き物として再びこの世に生まれるというアレである。

ご他聞にもれず、俺も転生者だ。

でもさあ。

普通、それって漫画とかアニメとかの主人公じゃね？

いや、せめて人間じゃね？

元は仏教の用語？らしいし、ありえないわけじゃないんだろうけど、何よコレ。

そう考えて腕を全部持ち上げる。

1 , 2 , 3 , 4 , 5 , 6 , 7 , 8 , 9 , 10。それ以上は数えるのが馬鹿馬鹿しくなってくるような腕、腕、腕。表面に吸盤がくっついてるようなのもあれば、ナメクジみたいにツルツルしてるのもある。中にはちよつと公衆の面前では表現しづらい、とても卑猥な形状のものですらある。先つちよに、縦に割れ目があるやつとかも。総じて脊椎動物のような骨の周囲を筋肉が覆っているような質感ではなく、あえて言うなら、象の鼻に近いものがある。

多種多様さは種の保存のためには自然なことかもしれないが、それを一人分の身体で実現するなと思う。

つていうか、触手だ。

象に例えたけど。無理。無理だから。腕として俺が動かしてるそれ。

触手とは思えない。

エロ方面では中々ご活躍のアレである。ファンタジー系の陵辱要素ありのエロゲだったら登場率8割を超えるんじゃないだろうか。俺もそれなりに好きだったりする。言うまでも無いが、エロ要員である。

勿論、好きって言っても使われてるのを第三者として眺める側での話しだけ。自分が使われる側なんて誰得だし、自分になったりする側なんてありえないし。

・・・話がそれた。

ともかく、死んだはずの俺は、気がついたらこの薄暗い洞窟内にいて、何故か触手になっている。

WHY?

生前、あまり触手に縁の無い生活を送っていたのに・・・、とか考えても、誰だってそうだろうし。

もしかしたら、今まで俺が見たことのある蛸とか烏賊みたいな触手を持った生き物も転生した人間だったんだろうか？

ま、いいか。

というか、煩わしい集団生活を送る必要が無いと考えれば、中々いいかも。早々に考えることを放棄した。自分の身体に対する嫌悪感なんて考えるだけ無駄無駄。

寝よう。

とりあえず、俺の触手生活はそうやって幕を開けた。

2日目

半日ほど壁を這っているカタツムリっぽい虫を見ていたのだが、昼過ぎに小さな熊が洞窟に入ってきた。

どうやらじっと虫を観察していたせいで俺に気付かなかったようだ。

っていうか、なんで虫をそんな集中して観察してたんだろう、俺。暇だったからいいんだけど。

60cmくらいの小さな熊はそのそと俺の間近まで近寄ってくる、鼻を鳴らして周囲を警戒し始める。洞窟内は結構深く、そのときは気付かなかったが、俺がいた場所はほぼ暗闇の場所だったらしい。

やがて、臭いを追った熊が俺の触手の一本を銜え、あれ？と思った俺が振り返ろうとした瞬間、思いつきり噛み付くと、俺はその痛み

に悲鳴をあげた。

「ぴぐんじゃ phじえ r がぼい hじえ r じ qじゃえ r！」

内心では痛ッ！くらいのつもりだったのだが、その声は予想外に野太く、しかも洞窟内だからか、やたらと反響して聞こえた。

思わず立ち上がった俺はだいたい2メートル以上。

視線があつた熊は割りと可愛い外見をしていたが、その目には明らかな恐怖が浮かぶ。

驚いた熊は悲鳴をあげながら洞窟から走り去っていった。

いきなり攻撃された上、一目で逃げられたことで少し怒りも湧いたが、じゅるじゅると音をたててうねる触手を見ると、まああの反応も判らなくも無いかと嘆息する。

誰だって暗い洞窟でいきなり奇声をあげて触手が襲い掛かってきたら、逃げるだろうし。

噛み付かれた触手も、数秒後には緑色の血？が停まり、傷も消えた。

痛みも無いので、さらにどうでもよくなってくる。

結局、その日は丸一日虫がコケを食べる姿を観察して終わった。

暇すぎだろ、俺。

3日目

暇すぎるので、洞窟の中を探索してみた。すると、入り口から百メートルくらい奥で行き止まりになってることが判った。だからどうってわけじゃないんだけど、そこには数本のつるはしと、一輪車？みたいなのがあった。

もしかして、ここ、鉱山か何かなんだろう？ つるはしも一輪車も、木でできている部分は腐食していないから、捨てられてからそう時間は経っていないみたいだ。

首（そんなものがあれば、だが）を傾げながら、つるはしを持ってみるとかなり軽い。

金属部分がけっこう大きいから、持ち上がるか心配だったが、もしかしたら軽い金属で出来てるのかもしれないな。

ふむ。

暇なんだから、鉋夫ごっこでもしてみるか。虫の観察も少し飽きてきたし。

なんとなく、そう考えてつるはしを振り上げ、壁に叩きつけると、当たった部分の壁が崩れ落ち、つるはしがへし折れた。

あつるえー？

折れたつるはしを見るが、その部分だけが朽ちていたわけじゃなさそうだ。

・・・ということは、今の俺の触手はけっこう馬鹿力だということだろうか。

試しに、もう一回、今度は加減してつるはしを振り下ろす。

土の壁はざくざくと削られていく。

なんだか面白いくらいに土が削られるので、これを次の暇潰しにす

ることにした。

どうでもいいけど、一日中暇つぶしって転生しても生活習慣が変わらないのか、俺は……。

半日ほど掘り進めると、なんだか硬い岩にぶち当たった。

壊してもいいんだが、そうするとつるはしを一本駄目にしないといけなくなりそうだったので、岩を掘り起こすことにする。岩に沿うように穴を掘っていくと、きらきらとした鉱石と一体になった岩が出てきた。

うっっん、なんぞコレ？

宝石？なのかな。大きさはだいたい直径１メートルくらいのでこぼこした球形で、俺の触手ならなんとか持ち上げられる程度の重さだ。

表面から見える鉱石は無色透明。ダイヤモンド？ないない。素人がテキトーに掘っただけで出てくるわけないもん。

だったらこれは何だ？いや、俺知らねえし。

・・・ま、いつか。しばらく考えてもよく判らなかつたので、面倒くさくなって途中、掘っておいた小部屋に転がしておく。

その後も掘り進めると、同じようなものが2つ出てきた。やっぱり判らんから小部屋に転がす。

そうしてビフォーアフターすると、洞窟の広さが数倍以上になってきたし、時間も経つたので今日は止めることにした。

さすがに少し疲れたので、今日はもう寝よう。

4日目

今日も今日とて鉱夫ごっこ。

掘り進んでいくと、今日も岩が出てくる。やっぱり無色透明の鉱石が埋まっていたが、もはや流れるように小部屋へ。

判らないことは後で考えるに限る。

そうして、掘って掘って掘って掘って、とうとう最後には外まで貫

通させた。

なんということでしょう。

入り口から行き止まりまで100メートルの、シンプルだった洞窟が、山の中を完全に貫通して入り口が二つに。内部のお部屋は7つ。4世帯の家族も納得の広々としたリビングです。

・・・ってやりすぎか。

とりあえず、貫通させた方の入り口から外を見るが、見渡す限り森だけで民家らしきものは無い。

ま、今の俺がそんなところに行っても相手にされないどころか、下手をしなくても殺されるだろう。

太陽の光の下で改めて見る俺の触手は、相変わらず表面がヌラヌラとした粘液で覆われていて、（性的な意味で）攻撃的だったり、（性的な意味で）威圧的な形状をしてたりするからなあ。

ともかく、今日は洞窟を貫通させたことで満足した。これ以上穴を掘り進めると崩落したりするかもしれないから、鉋夫ごっこは卒業かな。

うーん、でも明日から何をして暇つぶししようか？

・・・とりあえず寝てから考えよう。

5日目

今日は昨日と一昨日掘り起こした鉱石を見てみることにした。

とは言っても鉱石なんか判らんし、どうしたモンかなー。

あ、そうだ。

鉱石を覆ってる石を砕いていったらどうだろう？

余計なモノが無くなれば、多少は判り易いかも。

そう考えて、鉱夫体験一日目で壊したつるはしを持ってくる。

全力でやると鉱石も一緒に碎けるので、慎重に、慎重に石の部分だ

けを取り除いていく。

これは中々の暇つぶしになりそうだ。

・・・一個を完全に鉱石だけにするまで、だいたい2時間くらいかかったか。

多少歪だが、出来上がったのは元の岩の半分くらいの鉱石の塊だった。

出来上がってもよく判らんけど、これって水晶ってやつかなあ。

うーん。とりあえず他の岩も試してみるか。

2個目。 3個目。 4個目。 5個目。 6個目。 7個目。 8個目。 9個目。

・・・全部同じだった。段々コツが判ってきて、最後の一個は1時間以内に削り終えたが、それでもやっぱり出てきたのは同じ水晶らしき？ 鉱石だった。

たしか、水晶ってここは、石英が多く含まれる鉱山なんだろうか？

触手で腕組みしながら考えてみるが、やっぱりよく判らない。

価値があるかどうかよく判らないのでどうするか迷ったが、とりあえず小部屋に仕舞っておくことにした。俺じゃ、使い道ないし。

とりあえず今日はもう寝よう。

6日目

重大なことに気付いた。

俺、魔法が使えるみたいだ。

それに気付いたのは今朝のことだった。

目を覚まして、朝食のコケを食べてから外でラジオ体操をしていると、妙に日光がキツくなってきたから、光をさえぎるものが欲しいなあ、と思ったのだった。

そのままなら、後で木の葉とか枝で日傘を作ればいいんだが、その

ときはとりあえずなにか欲しい、と思ったただけだった。

次の瞬間。俺が立っている地面から、黒い光が出てきたと思うと、それは俺の身体に纏わりついて光をさえぎるヴェールみたいに全身を覆う膜になった。

それと同時に、それまで感じていた日光にたいする鬱陶しさが消えていた。

唐突なことで思考が停止していたが、我に返ると、俺は叫んでいた。

嬉しかったからかもしれないし、もしかしたら、単純に驚いたせいかもしれない。

ただ、確実なのは、その声を聞きつけて俺を見に来ていたヒトが、腰を抜かしたまま逃げていったことだった。危なそうだったから助けてあげたかったが、生憎若い女の人だったから、俺が近寄るわけにもいかない。

だって俺が近寄るだけで一枚画のシーンが始まりそうなもの。回想モードで何回でも見れちゃうよ。

あっはっは。そんな気がなくても陵辱ゲーのイベントにしか見えな

いキャラかー。

死にたくなってきたよーな。

・・・あまり考えないようにしよう。

それはともかく、魔法だ、魔法。

日傘魔法以外に何か使えないかと思って、色々と試してみると、とりあえず火を出すことが出来るらしいことが判った。

ふむ……。火か。

この魔法は洞窟の近くにあった岩を簡単に溶かせるくらいは温度が高いらしいが、使い方によっては自分も危ないので、洞窟での使用は控えることにしよう。

夕方、付近の木を数本折ってきて適当に積んでキャンプファイヤーをしてみたが、煙が酷くて目が痛くなってきただけだった。

やっぱり乾燥させないと駄目か。

でも、洞窟の中は結構湿ってるしなあ。

あ、そうだ。明日は、薪用の小屋を作ることにしよう。ついでに魔法の練習もしてみようか。

予定も決まったので、今日はもう寝よう。

1話 転生しました（後書き）

なんだか衝動で書きました。
続く・・・んでしょうか？

2話 触手生活始めました

7日目

小屋を作るための材料を取りに言っている途中、俺は重要なことに気付いた。

・・・そういえば、俺は小屋なんか作ったことないんだよね。

子供の頃からやたらと動物に嫌われる質^{たち}だったから、犬を飼って小屋を作ることも無かったし。

そんな根本的なことに気付いたのは、森に材料を取りに来た後の話である。

うゝゝん、地震とかあったら怖いけど、そこで寝泊りするわけじゃないから、壊れてもいいつくりにしてみようか？それなら、そう難しくないだろうし。

そう考えて森に行き、木を切ることにした。

とはいえ、丁度良^のい鋸^のや斧^のなんかあるはずもない。

それじゃ、どうするのかって？

ふふふ。俺の触手には、色々な奴があつてね……。何に使うためかは言わないが、表面がやたらとイボイボしたのとか、なんか注射器みたいな針の先から変な液体を噴出すのとか。

一生使う予定は無いが、やたらとバリエーションに富んでるんだ……。。

コイツもその中の一本なんだが、俺がその触手に力を込めると、案の定、触手の先端にある金属のような光沢の円錐形がギュイイイイイイイイインッ！と音を立てながら回転し始める。

フッ……。あえて命名するなら、それはドリル触手ッ！

男の欲望と浪漫が合体した、スペシャル器官！

こんな、素晴らしいモノが、俺の身体にあるなんて……。

しかもすごい……。大きいです。

うつとりとしながらその触手を木の幹にあて、ズブズブと押し入れていくと、すぐに幹をくりぬかれた木は倒れた。

・・・凄い威力だ。こいつをくらって無事な女・・・じゃなくて木はないだろう。

十数本の木を倒すと、それを引きずって洞窟まで戻る。

倒したときと同じ要領で木の邪魔な部分を落とすと、上手くドリルを使って木を材木に成形していく。

思った以上に簡単に材料が出来たので、次にそれを組み立てていく。俺の触手は人間よりもかなり力が強いが、なにせ一人でやっているので時間がかかる。それでも、夕方にはちょっとしたログハウスもどきが完成していた。

触手が活躍できる場はエロだけじゃないんだ！

昨今の触手Ⅱエロの風潮に、俺は新たな風を吹かせてみせる！

そう思っていた時期が俺にもありました。

勢いをつけてふりあげた手が、俺の意思とは無関係にうねってなんだか白濁色の液体を噴出した瞬間、その熱も冷める。

その触手から噴出した液体は奇妙なほど粘りが強く、でろりと吹き出た穴から垂れ下がっている。

どう見ても 液ですありがとうございました。

謎の液体を噴出しても、何も感じなかったが、しかし確実に何かを無くしたような気もする。不思議なことだ。

ただ、その液体を地面に掘った穴に始末しているときは、無性に人間だったときと同じ感覚を得ていたのは事実だ。あの、わけも無い虚しさとかやつちまった感とか、脱力とかはかなり酷似していると言えるだろう。

・・・さて。明日のために、今日はもう寝よう。なんだか無性に疲れた。

8日目

朝、目を覚ますと、相変わらず洞窟内のコケを食べ、その次にラジオ体操を始める。

一人だけで自分でリズムをとりながらする体操は少々恥ずかしいが、雄大な自然を前にしながらやると爽快だ！第一、誰も見てないから恥ずかしがる必要も無いしね！

そういえば、そろそろコケにも飽きてきたところだ。

毎日俺が食べるせいで、生育面積が減ってきているような気がするし、今日は自分が何を食べられるのか調べてみよう！

あと、寂しいからなんかペットとか欲しいかも。

殺したりするのはカンベンだけど、家畜になるならこの先色々と助かるし。

そう思いつくと、触手を駆使して森の中を移動し始める。

・・・2時間経ったが、何も見つからない。

このあたりは動物が少ないのか？河岸をかしかえるべきか迷ったが、あまり遠くまで行くと、洞窟の場所が判らなくなってしまうから、断念。

ま、もう少し捜してみよう。

てかどうでもいいけど、この触手、滅茶苦茶素早いな。

今も歩くスピードで動かしてるつもりなんだけど、多分時速60kmくらいでてるんじゃない？

下手に人間にぶつかったらひき殺しそうだ。気をつけないと。

そうして捜し始めて早4時間。

くくく。見つけたぞ。やっと見つけた。

草むらを挟んでだいたい10メートル先。

なんか草を食べてる、白いモコモコの生き物がいた。

見た目は羊っぽい・・・かな？でも、羊よりは首が長そうだし、なんか長い角も生えてる。

草を食べてるってことは、多分、草食獣だろう。

見た目も大人しそうだから、どうにか捕まえてみたいが……。

あ、そうだ。

フェイスハガー先輩みたく、問答無用で飛び掛って捕まえれば……。

妙案も浮かんだところで、レッツトライ。

触手を使って音も無く地面を蹴ると、それを傘の骨のように広げながら、羊（仮）に飛び掛る。

多分、DMC4のエキドナみたいな感じなんだろうけど、触手の数が圧倒的に多い分、より悪夢的な絵面になっているだろう。

自分の身体に影がさしたことで羊（仮）がこちらを見上げようとす
るが、遅い。遅いわあ！

蛸が魚にそうするように、触手全部を使ってグワシッ！とキャッチ。

羊（仮）は暴れるが、俺がびくともしないため、数分で大人しくなった。

ふはははは！暴れれば暴れるほど俺の触手は絞まる！貴様は捕まった時点で負けていたのさあ！

そう考えてほとんど触手で身体が埋まった羊（仮）を見ると、そこにいたのは口から泡を吐いて他界寸前の草食獣である。

やりすぎたーッ！

慌てて触手を離すと、どうにか呼吸を整える羊（仮）。

・・・よかった。いきなり動物を殺したとか、トラウマレベルの思ひ出がまた増えるところだった。

それから、どうにか触手を首につないだまま洞窟に戻り、途中で取ってきた蔓を使って簡単な紐を編むと、それで杭に繋いでおく。洞窟の近くは草も多いから、困ることもないだろう。

とはいえ、運動不足は良くないし、でも毎日放牧してそれについて

いくのも面倒くさい。

・・・明日にでも、柵さくを作ろうか。

害獣が寄ってこないから、一石二鳥だし。

あ、今日朝以外何も食べてねえや。・・・ま、いつか。腹も減っていないし。

とりあえず、今日はもう寝よう。面倒くさいことは明日の俺に任せて、今は寝たい。

9日目

いつまでも羊（仮）では可哀想なので、名前をつけることにした。

とりあえず雄雄しく生きるという意味で羊漢ヨウカンでいいだろう。・・・雌メだけ。

とりあえず午前中、切り出してきた木で羊漢ヨウカンの柵を作り、放牧してから森を探索しに出かけた。

この森は色々と実をつける木が多いみたいだが、正直、見たことも無いものばっかなので迷っている。

今、俺の触手が持っているのは、紫色のりんごっぽい果物と、紅いバナナみたいの、それからエメラルドブルーの洋ナシ風の何かである。

どれも果てしなく怪しい……。

毒とかあるんじゃない？と思い出すと少々気後れしてしまうが、しかし食べ物が無いと困る。今日も結局コケを食べているのだ。

ええい、男は度胸！なんでも試してみるのさ！

三つ同時に、触手の先に開いた口で飲み込んでいく。

……。

あれ？普通に美味いぞ？

てか見た目通りの味なんだが。色が違うくらいで、中身は同じなの

か？

でも、なんでこんな類似があるんだろ？

……うっん、判んね。

ま、いつか。

とりあえず何個かの実をもちで帰ることにした。中心に種もあるみたいだから、洞窟の近くに植えてみよう。うまく植樹できれば、態々家から離れる必要も無くなる。

自分、基本的にインドア派ツスから！

今更な設定を思い出して誰にともなく言ってみる。……返答は無かった。

洞窟に帰ると、羊漢は相変わらず草を食べていた。

なんとなく和む。

でも、何故か俺の姿を見ると少し逃げる。

第一印象が悪かったかなあ、と思いながら羊漢を紐で繋ぎ、洞窟に戻る。

明日は魔法の練習でもしてみよう。

10日目

空を飛びました

11日目

色々なことがありすぎたので、順を追って説明しようと思う。

まず、昨日の朝のこと。俺は食事を果物に変えたせいか、体調が今までになく良好だった。

やっぱり、できるだけ洞窟の近くにこの果物の木が欲しい。

食べた後の種は洞窟から少し離れた場所に植え、その周りに肥料を

巻く。早く大きくなれよーと思いつながら水をまいてると、
しても魔法が発動した。

え？どんな魔法だつて？

ジャックと豆の木とかを想像してもらえば、判りやすいです。

雲に突き刺さるほど高くはないのが救いか。それでも樹齡が判らな
いくらい背が高い。

さらに3本の木が捻れるようにして育っていて、一本に融合してい
るのだが、それがまた太い。

間違いなく実がなつてた木よりも高い。

なんておませさんな0歳児だ！・・・いや、意味判んねえよ。自分
で自分が。

うーん、どうも俺の魔法つて、無意識の部分がかなり大きく関わ
つてきてるみたいだ。

だからどうつてこともないんだけど。所詮、しよせんにわか触手の考えであ

る。もっともらしいことを言っても、その意味までは考えてないんです！

すくすくと育った木には、いくつもの実がなっていた。

若干テンションがおかしくなっていた俺は、これは行くしかないでしょう！と思い立つと、触手を使ってすると木を昇っていく。

フツ。木登りⅡ落ちるは前世までの話よ。今なら「W R Y Y Y Y Y
Y Y Y Y！」とか言いながら幹を垂直に昇っていくことも・・・あ、
発声の部分でアウトか。どこまでも片手落ちだな。

頂上近くまで上ると、途中でもいいた実を食べ始める。

雄大な大自然を眺めながらの食事は中々いいものだ。さつき朝食食べたばかりだけど。

今までで一番高い位置に来たお陰か、西の方に集落が見えた。

いくつかの家屋が並んだ、昔ながらの村といった感じである。

目を凝らすと、突然現れた巨大な木に驚いたのか、何人かの村人が

こつちを指差していた。

コッチミンナ。

てか、なんで10km以上離れた位置がしっかり見えるんだろう。
いや、触手視力スゲー！とは思っけどさ。

今更だけど、随分人間離れたモンだ。便利だから別にいいんだけどさ。

さて、あんまり見られるのも嫌だから、降りようか。そう思った瞬間、いきなりドップラー効果を伴った何かが近付いてきた。

何だ？

目をそちらに向けると、青い光に覆われた流星？が割と近くを飛んでいく。

流れ星？でも青いしなあ。

薄々とは感じていたが、どうもファンタジー世界というのは不条理な気がする。便利な分には問題無いんだけど。

流れ星を見送りながらそう考えていると、後ろから突風が吹いてきた。

衝撃波？ってやつか？もしかして、音速超えてた？

直撃を受けても特に俺は怪我もなかったが、俺が昇っていた木は別だ。

折れはしなかったが、大きくしなり、その勢いで果物がバラバラと落ちる。

それを見て「ああ、勿体無い。」とは思わなかった。それどころじゃなかったのだ。

木がしなったせいで俺は空中に放り出されていたから。

一瞬の浮遊感と共にアイ・キャン・フライ！

飛んでる！飛んでるぜエ
えええ！
！とか言ってる場合じゃね

ぎゃーッ！死ぬ！死んでしまっ！

どうにかしないと・・・！

そっだ！風を・・・、風を掴むんだ！

そう閃き、触手を開く・・・が、落下速度にはまるで変化なし。ですよねー。傘みたいに開いても、骨組みの部分しか無いんだし。

しかしここはファンタジー世界！

都合良く目覚めてくれ！俺の能力！^{チカラ}でないと俺が地面の染みになっちゃうっううう！

ピカ

ッ！

最終的に魔法に頼った俺の全身から突然あふれ出す意味不明の発光現象。

え、マジで？と思う間も無く、俺の全身は青い光に包まれた。

それと同時に意識は消失。

次に気がついたときには、なんか地面で寝てた。・・・正直、何かなんだか。

薄暗い中周囲を見回すが、見覚えのない木ばかりしか見えない。

とりあえず、生きていたのは嬉しいが、しかし、ここ何処だろ？時間も明け方ってことは、丸一日意識を失ってたのか？

よく見回すと、ここから見える山の向こうになんだかやたらと背の高い木が見えるから、もしかしたらあそこが洞窟のある方向かもしれない。

行ってみるべと思い、そちらに向かって高速で移動を始めた。

そっぴや、あの木の上からなんでこんな距離を移動してたんだろ？

自分の身体だが、意味の判らない部分が多すぎるな〜と思う。

そんな風にテンションが下がっていたせいだろっか。

鳥が集団で襲ってきました。

さっきからいきなりすぎだろ！と突っ込みたいが。所詮は畜生^{しよせん}。

嘴でツンツンされるのはちよつと痛かったが、半分以上を捕まえて
やったわあああああッ！

どうやら鶏と同じく飛べない鳥のようなので、羊漢と同じ柵に放り
込めば飼うこともできるだろう。

タナボタだが、しかしこれほどの好機、退かぬ、媚びぬ、省みぬ！

例によつて蔓を使って縛ると、触手でそれを落とさないように持ち
上げ、走る。

羊漢、今お友達を連れて帰るよおお

！

そう叫びながら俺は家路をひたすら走った。

で、今日。

なんとか洞窟まで戻ると、俺は予想外の事態にへたり込みそうになった。
つていた。

あばばばばばば。

なんで。

なんで人がいるんだよ！

しかも、大勢！

俺が埒わにしている洞窟の前に、何人かのヒトがいたのだ。多少距離があるから判らないが、洞窟を指差しながら何かを喋っている。

まさか、家捜しするつもりか！

洞窟の中にあるのは精々が果物と数日前に掘り起こした鉱石だが、それでも勝手に入られるのは気分が良くない。

しかし、3人ものヒトの前に出るのは、正直怖い。

悪さをするわけじゃないんだし、放っておいて欲しいが、自分が触手であることを考えると最悪殺されるかもしれない。

元々コミュ能力は低い上、そもそも今は会話することも出来ないの
で、さらに絶望的だ。

でもここを追い出されたら、行く場所なんて無いし・・・、話しかけるのは怖いし・・・。木の影からじつと様子を見ていると、ふとヒトがもう一人いるのに気付いた。

他の3人と同様に、金髪の男だ。そいつは、こともあるうちにウチの羊漢の紐を引っ張っている。そのまま持ってきた袋に入れるつもりみたいだ。

あ・い・つううううううう！

見知らぬ人間に対する恐怖が、怒りに上書きされる。

見てろ！見てろ！

そつだ！そつする^{ゝゝゝ}と決めたときには、既に行動は終わっているんだ

！心の兄貴もそう言ってたし！

俺は、鳥の紐を木の枝にくくりつけると、正面から姿を現した。

「ぴぐじなえjhgあ@おじえhrt!!」

それは俺の家だ！勝手に入るなッ！

内心はビビりまくっていたが、なんとか触手を振り上げ、自分を強そうにアピールする。

金髪共は最初、意味不明そうにこっちを見ていたが、俺がへっぴり腰のまま走っていくと、慌てて逃げ出した。

・・・良かった。本当に良かった。殺されなくて良かった・・・。

袋に入れられそうになっていた羊漢を出してやると、こいつはすぐに草を食べ始めた。

どうやら俺のことは眼中に無いらしい。

さっきの俺の勇姿を見てくれないとは、残念なことだ。

ともかく、俺は縛っていた鳥たちを柵の中に放牧すると、洞窟の中に戻った。既に太陽は真上に来ようとしているが、なんだか色々と疲れた。

・・・今日は寝て、明日からまた頑張ろうと思う。

3話 一人ぼっち生活続いています

12日目

果物の木から落ちてた実は、羊漢と鳥たちにやることにした。

俺は大丈夫だったが、正直動物が喰えるか心配だったけど、杞憂だったらしい。

今、奪い合うように全員が果物の入ったバケツに口を突っ込み、貪っている。

こうして見ると、こいつらも可愛いモンだね。

そういえば、今日はどうしようか。課題は色々あるが、どれも急ぎじゃないんだよね。

考えてると、ふと青狸映画の駄目小学生の科白が頭に浮かぶ。

人間が生きていくうえで必要なものは衣食住である、だったっけ。それは俺も変わらないだろう。

生きていく上で必要なものは衣食住。でも俺は触手だから「衣」は必要無い。「住」も洞窟があるから問題無い。だとしたら「食」か。コケから果物にグレードアップしたとはいえ、あまり偏食もよくないだろう。

とはいえどうしたモンかな。

一昨日のことで、俺の魔法に植物を一気に育てる力があつたことは知ってるけど、しかし作物を育てるための肝心の種が無い。

ここから西の集落の人間なら持つてるかもしれないけど・・・。

うーん、今更交渉なんかお互いに無理だし、そもそも色んな理由でコミュニケーションなんか出来ないし。

だからって短絡的に奪ったりすれば、一気に退治される魔物コースだ。辺境の村を苦しめる悪いモンスターとして、勇者様ご一行の経験値とゴールドに化けることになるかもしれない。

ああ、なんかそう考えると、俺ってどう考えても踏み台なんだな。ちよつと凹む。

つっても現時点では村人を追い払ったりスレスレのグレイゾーンな

んだから大丈夫。・・・のはずだ。っていうかまだ大丈夫だよな？
昨日のアレで退治されたりしないよね？

元はあっちが俺の家を勝手にガサ入れしようとしてたんだから、非
は無いはず。

むしろ羊漢なんて拉致されそうになってたんだぞ！正当防衛だ！犯
罪者に人権なんざ無えって昔の人も言ってたし！

自己弁護をしてどうにか落ち着くことが出来た。

とりあえず、俺に出来るのは襲ってくるかもしれない外敵に怯える
よりは、自分の生活を豊かにすることだ。

今のところ羊漢はミルクが出ることが判っているし、鳥達は番つがいでと
らえているので、卵が期待できるだろう。

・・・って、あ！鳥達の小屋を作るのを忘れてた！

昨日は精神的ショックで放牧したまま寝ちゃったから、一晩中外で
いたし・・・、ごめんよおお！

自分の所業に感極まって謝罪をしようと近づこうとするが、鳥達や羊漢は示し合わせたように逃げていく。

心なしか、こっちを見る視線がキツい気がする。・・・あ、羊漢が唾をペツて感じで吐き出した。「ようやく気がついたか愚図ぐずがつ！」
って意味でしょうか？

なんか嫌われ方が半端無い気がすんだけど、前世から引き継いでる動物に嫌われるスキルだよね？その影響だよね？俺の存在が気に入らないわけじゃ、ないんだよね？

そう思ったが、コミュニケーションがとれないので確認が出来ない。

むしろ話が出来たとしても、怖くて聞けない。

・・・今日は、鶏舎と羊漢の小屋を作ろうか・・・。いえ、作らせていただきます・・・。

13日目

どうにか昨日完成した鶏舎と羊小屋は、我ながら中々の出来だと思う。

通気性は良く、雨漏りもせず、なおかつ外敵をシャットアウトとか、
匠たくみの技なんじゃね？

おかげで羊漢や鳥達も多少は機嫌が良くなったし。・・・相変わらず俺が近付くと逃げられるけどさ。

一人じゃないのに一人ぼっちって不思議だね〜。

・・・全然笑えねえ。

とりあえず、今日は他のことをしてみよう。

具体的には、しようしよう詐欺一歩手前の魔法の練習とか。

今のところ使えるのが判ってる魔法は、今も使ってる日よけと火と作物の生長、あと、謎の発光現象。

この世界の魔法に系統とかがあるかは知らんが、見事によく判らんラインナップだな。

『日よけ』は一回使ったら未だに効果が残ってるし『火』は威力が

阿呆みたいに高い分調整が難しいし、『作物の生長』は色々と条件がないと並の植物くらいまでしか成長しないのは判ってるんだけど。

・・・謎の発光現象がなあ。

木から落ちてたとき、偶然使えたけど、なんだったんだろ、アレ？

ワープ？・・・でも、なんか時間がやたらと過ぎてたしなあ。ほぼ丸一日くらい。

意味判んね。まさかキングクリムゾン？いや、ナイナイ。

自分まで能力が効いてたら意味無いし。そもそもスタンドじゃないし。

うーん。ま、今はいつか。どうでも。

その4つ以外にはなんか使える魔法はないか、試してみよう。

・・・そしてしばらく経って。

無理でした。3時間かけても無理ってどういうこと？

うんうん唸ってるだけでこんなに時間が過ぎてるなんて、これなんてキングクリームゾン？

『矢』に刺されたわけでもないのに！

・・・冗談はともかく、全く進展が無い。

もつと色々魔法を使ってみたいんだけどな。

だからって謎の発光現象のときみたいに一か八かの状況に自分を追い込みたくないし。正直、自分が一番大切なもの！

とりあえず、もう一回試してみよう。まずはさっきまでやってた念動力から。

目の前に置かれたりんごもどき。

それを見ながら、『浮け』と念じる。念じる。念じる。念じる。念じる。・・・変化無し。

びっくりとも浮かないし。段々とムカついてきたので、じつとりんごもどきを睨む……が、やっぱり変化は無い。

もしかして、野生モンスターだから覚えられる特技が少ないのか？

うーん、魔法は使いたいけど他のヒトと一緒に冒険をしないと駄目なら、諦めたほうがいいのか……？

そう考えながら、悩んでいると、突然俺の身体が光り始めた。

唐突すぎだろ！相変わらず！

慌てるが、光は収まらないどころか余計に強くなる。あわわわわわわわ。

あ、羊漢、鳥たちも。どうしてそんな柵の真逆の方に走っていくの？俺、ピンチかもよ？主に精神的な理由で。メンタル

自分が一番大事なところは清々しいほど俺に似ている畜生どもの姿にがつくりと落ち込み、視線の先にりんごもどきが戻ると、光は徐々に俺の目（多分）の位置に収束。

一瞬の後、そこから極太の光が放たれる！！

意味判らねええええええええええ！！！！

なんで目ビームなんだよ！口から怪光線の次くらいにネタ臭がブンするぞ！？

しかも光が収まった後の光景……。さぞや大きな破壊の痕がある、と思いきや何も変化は無い。

あの演出で破壊力ゼロってどういうことだよおお！

テッテテッ 触手Aは見た目だけビーム（仮）を習得した！

なんか脳内に嫌なテロップまで出てくるし！しかもAって他にもいるのかよ！

・・・落ち着け、落ち着け。B E C O O L。俺は出来る子。今までは充電してただけ。本気出してなかっただけ。余裕を持つんだ。心は紳士で身体は触手。それが俺じゃないか。

自己暗示をかけることでどうにか持ち直す。

・・・ふう。使えない魔法があつたとしても、それはそれでいいかあ。

多少は残念だが、俺が生活するうえでは、別にマイナスにはならないし。まあプラスにもならないんだけど。

そう考えてりんごもどきを持ち上げようとすると、違和感に気付いた。

・・・あれ？重いぞ？

別に持ち上げられないわけじゃないんだけど、さっきよりは明らかに重くなってる・・・？

不思議に思つてよく自分の触手が持っているものを見てみると、りんごもどきに変色している。

青みが強い紫だった色が、茶色がかつた灰色になっていた。

なんだこりゃ？

果物程度なら簡単に碎けるだけの力をこめても、びくともしない。

硬いし、重い。見た目だけは果物のままだが、まるで石だな。

うーん、もしかしくなくても、これがさっきの目ビームの効果？

・・・あれか？石化？とか？

ええー？マジでえー？石化魔法って、金の針で回復できる劣化版即死魔法だろ？

なんでそんな危ないやつを俺が使えるの？

いや、見た目だけビーム（笑）よりはいいんだけどさ。

俺じゃ、使い道が無いんじゃないかな。人間相手に使ったりするのなんて無理だし。無理無理。絶対無理。怖いし。使うくらいなら、逃げるし。

一瞬、リアルに自分がこの魔法を使う瞬間を考えて、怖くなってき

た。シリアスに路線変更とか、無理だからね、俺！

ガラスの精神は伊達^{メンタル}じゃないッ！

・・・とりあえず、この魔法については平和的な使い道を模索する方向で前向きに検討していきたいと考えております。（政治家答弁）

14日目

また青い流星が流れてた。しかも、やっぱり昼間に。

どうでもいいけど、こんなに流れ星が多いとありがたみが無えな。もしかしたら、この世界じゃ願い事をする風習なんかは無いかも。あれ？てか、あれって日本だけの風習だっけ・・・？

ま、いつか。

とりあえず、今日は山菜を搜してみよう。果物以外にも野菜があれば、栄養が偏る心配も無いし。

・・・野生動物つばく、肉を生で食べればビタミンが摂取できていいんだろうけど、ハッキリ無理だしねえ。血とか出るだろうし。そ

もそもこの身体にビタミンが必要なのか判らんけど。

鶏舎と羊小屋から柵の中に放牧すると、山に向かって出発する。

本当は洞窟からあんまり遠出したくないけど、近くの森は粗方探し終わってるからなあ。

しばらく山を登ると、背の低い木がまばらに生えた草原があつた。
このあたりで採取してみようか。

さて、ここで問題です。

？元から知識はほとんど無い上に、植生の違う世界なのでどんな植物が食べれるか判らない。

？人間が大丈夫でも、自分はどんなものが毒になるのか判らない。

？情報ソースは皆無。

以上の条件を満たしつつ、山菜を採取できる方法とは为什么呢しょうか。

・・・答えは、”自分が直接食べて確かめる”でしたー。

俺の目には神農さんみたいにレントゲン機能は無いから、腹痛で調べていくしかないのが嫌なところだけど。今更、古代中国の人よりもアナログな方法を使うことになるとは予想してなかったよ。

ともかく、目についた草を少しずつ触手の先から食べていく。リスクは大きいけど、これで食べられるものを見つければ、あとは俺の魔法で量産できるから、心配は無い。

とはいえ。

うげ、渋い。

次は青臭い。

臭いがきつい。

味がしないけど、食べた触手が凄まじく痒い。

痺れる・・・ってこれ毒だよ。多分。

えーと次は・・・、あれ？あれれ？いつの間にか、お花畑が。あはははははは。綺麗だな。蝶々さんもたくさんとんでるし。

なんだか。それが凄く違和感があるんだが・・・。何故だろう？

・・・不思議なこともあるもんだ。

とりあえず、今のところ試した草は全部駄目だ。

葉っぱの形とか色を覚えてから、全て捨てておく。

最後に試した葉っぱだけは理由が判らないが、無性に捨てることに抵抗があった。しかしいらないものをいつまでも持っておくのも面倒なだけなのでやっぱり捨てておく。

そうしてまた草を採取して、地道に食べる。

結局そこから4時間くらいかけて、見つかった山菜は5種類。因みに毒草は6種、さらにもう一回意識を失ったことを追記しておく。
・・・本当に何があったんだろ？

山菜の内訳は、ニラっぽい草。臭いも味もほとんど同じ。

アロエみたいな草。苦味はほとんど無い。ただし汁がつくと痒い。

山芋的な何か。独特の風味があるが、不味くはない。むしろ美味しい。これも汁がつくと痒い。

白菜とキャベツの中間っぽい植物。レタスに似た苦味はあるが、食べれないわけじゃない。

キュウリに似た蔓植物の実。中身は黄色で、味はむしろ南^{カボチャ}瓜っぽい。

以上の5種の山菜をそれぞれいくつか持ち、洞窟に帰る頃には日も傾き始めていた。やっぱり二回も意識を失ったのが拙かったか。

てか、マジで何があったんだ？

うーん、よく判らん。

記憶が無いっていうよりは、それを思い出さないように自分で鍵をかけてる感じ。

いつの間にそんな器用なことが出来るようになったんだろ？

ま、
いつか。さて。明日は畑を作っていくことにしよう。

4話 ダンジョンつくってます

15日目

見る見るうちに増えていく山菜を見てみると、魔法の反則さがよく判るな。

なにせ、俺がすることは土地がやせたウネに肥料を混ぜた後、山菜の種を植えて水をかけるだけだ。

あとはなんか俺の身体から染み出す緑色っぽい光が勝手にキモい速度で生長させてくれる。その繰り返しで俺の周囲にはすぐに山菜が出来る。開始半時間も経ってないんだが。

食糧危機？なにそれってな具合。

出来上がった山菜は自分が食べる分と種用を残し、残りは刻んで羊漢と鳥達用の餌に。

相変わらずコイツらは俺が近寄ると逃げていくが、餌の入ったバケツには突撃してくる。

ほぼ一日中草とか虫を食ってるのに、そこまで腹が減ってるのかね

く？

考えていると、ふと洞窟が目に入った。

そういや、一旦中を拡張してからは全くいじってなかったが、また施設を大きくしてみようか。

既に俺が暮らす分には充分過ぎるくらいの広さにはなっているから単純に暇つぶしのためだ。

暇なものは暇だからしょうがない！！

とある理由があつて断念をしていたが、それを解消できる目処もたつたことだし。

それに、毎日適度に身体を動かすのは健康に繋がる。前世でも、ひとりでジョギングやら筋トレやらしてたっけ。友達いなかったし。まあその辺は今も変わらないんだけど。

・・・考えないようにしよう。それが誰にとつても幸せな選択だ。

洞窟の中に移動すると、少し入ってから数日前活躍したつきりだっ

たドリル触手を持ち上げる。

一発ネタ？

え、何のことですか？伏線ですよ、ちゃんとした。（しれっ）

まずは、すでに掘った場所の成型から。そう考えて、ドリルを回し始める。

ギューイイイイイイイイイイインツツ！！！！

相変わらずロボの腕についてないのが残念になってくるくらいの回転数だ。

ドリルはガリガリと音をたてて丸かった穴を、四角い通路に成型していった。だいたいの大きさは2.5m×3mくらいか。丁度、俺が触手を縮めなくても楽に行き来できる大きさだ。

1時間くらいで通路と小部屋の成型を終えると、次は別の魔法の順番だ。

そう、石化ビームの。

2日前に覚えたこの魔法（多分）の使い方をしばらく考えてたんだが、ふと、今朝どこからともなく電波がやってきて『別に戦いだけじゃなくて生活に使えばいいんじゃない？』とコロンブスの卵的な発想をすることができたのさ！

ありがとう、電波！すごいぞ、電波！

ただ、あんまり頼りすぎると窓に鉄格子のある病院に入院することになりそうだから、それ以降は受信しないようにしたよ。

レオ様みたいにテロとか殺人とかマジ勘弁だし。

気をとりなおし、四角い通路を順次目ビームで照らしていくと、なんてことでしょう！

あんなにでこぼことしていた丸い通路が、コンクリを使ったかのよ
うな石造りの美しい通路に。匠渾身の作品です。

ふむ。これで崩落の心配は無えだろ。目ビームで作った石は俺が全
力で締め上げても中々壊れないし。

そうして粗方石でコーティングすると、次は装備 触手 つるはしをして、新しい通路を作り始める。

元々が一本道だったから、色々と複雑な構造にしてみよう。下手すりゃ、ここに竈城することになるかもしれねえんだし。

備えあれば憂い無し。例え勇者がくることになったとしても、準備さえしっかりしておけば、恐るるに足らず！

くくく。

ボスが何処にいるか判らない上、異常に複雑なダンジョンなんて誰も攻略できまい！宝箱も設置しないしな！

電波は俺に柔軟な発想をもたらしてくれた……。そう！戦うのが嫌なら、戦わないまま有耶無耶うやむやにしちまえばいいんだ！

旨味の一切無い、本当の意味での迷宮ダンジョン……。

俺なら、まず放置するね。っていうか、相手しないよね？普通。

そうしてザクザクと掘り進めて行くと、また例の岩が出てきた。

表面には、やっぱり鉋石が埋まってるし。そういや何なんだろう、これ？

前に掘った岩は、面倒くせえから今も小部屋の中に放ったらかしにしてるけど。

うーん。そういや、この洞窟って元々誰かが掘ってた跡だったけ？もしかしたら、この岩を採るための鉋山だったのかなあ。

……あるえ？

それって拙くね？いや、待て。マテマテ。今の俺の客観的な情報を考えてみる。主に人間とか、人間とか、人間とかから見た俺の像を。

？元々近所の村の住民が掘ってた坑道に棲みついたモンスター。うん、これは間違いない。ってーか、否定のしようが無い。

？見た目的に明らかに人類っていうか女の敵っぽい。……うん。これも、仕方無い。ホイミンの一種ですって言うには俺の触手はエグ過ぎる。同じ『ゲーム』でもこっちは「ひぎい」とか「らめえ」が標準装備の18歳未満お断りのアレだし。

？何度か人間が近寄ったが、その度に威嚇してくるから少なくとも、友好的ではない。．．．．．うん。これも、見かたによっては、仕方無い．．．かも。だって知らない人って怖いんだから、しょうが無いだろ！？

？巨大な木を育てたり、家畜を飼ったりと段々とその縄張りを広げてる。．．．．．見えないことは無い．．．か？家畜はともかく、樹は付近の名物レベルだからなあ。

以上から導き出される答え　今のところ大丈夫だが、将来的に侵攻してくる可能性を考えると村のためにはいてもらっては困る、つまり居ないほうが良いモンスターということ。

そして、危険なモンスターだと判断されたら、村人が、それに雇われた一行が退治しにきたりするのが普通．．．だよな？

洞窟の奥で、なんか玉座に座って一行を待ち受ける俺。

ホイホイと洞窟に入ってきた殺る気満々のご一行。
明らかに勝てないし、武器にビビッてヘタレる俺。

当然命乞いのコンボに「世界の半分をやるう」．．．

アッガイやドムなんてお断りだッ！

・・・だからって戦うのはカンベンだけだな！

だからせめて、複雑すぎるくらい複雑なダンジョンを作って、諦めさせてやるわあああああああッ！！！！

16日目

昨日、日が暮れてからどうにか正気に戻ったが、気がついたら全5階層のダンジョンが完成してるってどういうことだろう。

とりあえず、ドリルで整地してから目ビームでコーティングしておいたが・・・。

そういえば、また小屋に連れて行くのが遅くなったせいか、今度は羊漢に蹴られるわ鳥共につつかれるわと、容赦無い折檻をされた。

俺のメンタルを慮^{おもんば}つたりとかは全く無い、素晴らしい攻撃でございました。普段は餌を奪い合う仲なのに、なんでそんなとこだけ協力しあうんだろ。

だが・・・、知ってるぞ？その行動が、本心の裏返しだってことくらいは。

『忘れられたかと思っちゃったじゃない！ちゃんとお世話してよね！』って言いたいんだろう。本当は。

・・・フツ。ツンデレか。そう考えると、不思議と可愛く見えてくるものだ。

しかし、羊一頭と鳥15羽にいきなりツンデレされるとは、もしかしてモテ期だろうか。触手のモテ期サクセスストーリーって陵辱物語以外に知らなかったから、新鮮だ。

よしよし。俺はデレるまで気長に待つタイプだから。

じつとりと生暖かい視線を向けると、鳥達も羊漢も視線を合わせないまますぐに俺から離れていく。

・・・ツンデレだよな？

若干不安になってきたが、応えてくれる者はいない。

気を取りなおして、ダンジョンの拡張を再開する。

そういえば、昨日掘った場所だけでも、数十個の岩が出てきたが、あれって結局何なんだろう？

宝石？・・・にしては、俺が住み着いてからものんびりしてんだよな。価値が高いものなら、すぐに排除されてただろうし。

つつてもここが鉱山だってことは、多少は価値があるものなんかねえ？

ま、いつか。考えるの面倒くさい。

とりあえず、1つの部屋じゃ入りきらなくなってきたから、別の部屋に押し込んでおく。

また暇を見つけて研磨しておこう。

しいて言つなら毎日が日曜日だけだね！今も昔も！

前世では、よくNEETと呼ばれてました！

違うモン。引きこもりとニートは同じわけじゃないモン。でも俺は両方に該当してたよな？

まあいいさ。俺が本気を出すほどの場に恵まれなかったただだ。．．．．．と思えたらどれだけ幸福なんだろ。

若干鬱が入りながら、つるはしを持つと、俺は洞窟の地下に潜る。

地下四階までくると、つるはしをふるって土を掘り始めた。昨日は気にしてるほどの余裕が無かったけど、やっぱり簡単に掘れる。

ゴリゴリと掘ってしばらく進んだら、ドリルで整地してから目ビームで固める。その繰り返し。たまに例の岩が出てくる。

そーいやRPGとかのダンジョンってやっぱり俺みたいな低級モンスターが酷使されて作ってたのかな？

こっ、魔法でババツと出来たりとか．．．．．、無いみたいだな。

無意識の欲求だったはずだけど、今回はいつも唐突に出てくる魔法の光は沈黙してる。どうやら、ダンジョンを作る魔法は無いみたいだ。

残念。簡単に終わるかとおもったのに。

俺の嫌いな言葉は『努力』と『頑張る』だが、こればかりは手を抜くわけにはいかない。他でもない自分の命がかかってるから。

地道にやってくしかないだろう。

退治されないうちに。

昼を過ぎる頃には、どうにか8階層まで完成した。鉱石はもう数えるのも面倒くさいくらい出てきている。

どうも深い場所ほど出てきやすいみたいだ。使い道が無いからどうでもいいんだけど。

洞窟から出て、料理の準備を開始。

目ビームで作ったかまどに火をおこし、同じく粘土を石化させて造

った鍋を置く。

とりあえず水と灰汁又キした山菜を色々、隠し味に羊漢のミルクを少し加える。・・・どうでもいいけど今、の表記を途中で切って”漢のミルク”って読むと色々と気分の悪くなる映像が浮かぶのは気のせいだろうか。

名前のつけ方を間違えたかも。

・・・とりあえず深く考えないようにしよう。触手だからってソッチ系までジャンル制覇する必要は無い・・・と思いたい。つーか、ソッチで触手の受容があるのか判らんし判りたくもないけど。ネタとして楽しむ分には構わないが、さすがに実演はしたくないんです。

マジで。マジで。

アッ
！

いつの間にか料理が完成してたのでお玉ですくってみる。多少、冷ましてから触手の先から呑むと悪くは無い。

っていうか結構美味い。

料理とか作るの初めてだったけど、案外出来るモンだな。

モリモリと食べる俺の横で羊漢や鳥達も食事をしている。

なんだかのどかな風景だ。

最近、本当に余裕が無かったからなあ・・・。

そう考えると少し泣けてきた。

さて、ご飯を食べたし、少し寝ておこう。起きたらまたダンジョン建設。十階層もあれば、充分でしょ。

5話 触手のなにがわるいんだ

17日目

今朝気がついたんだけど、鳥たちが卵を産んでたみたいだ。

放牧するために小屋の扉を開けたんだけど、一向に出てこない奴がいたから調べてみたら、中に敷いた枯れ草の中で卵を温めてた。

確認しただけでも、五つもあった。早速卵かけご飯・・・は無理だから、ゆで卵にしようと思っただが、子供を必死で守ろうとする親鳥の眼光と、あと主に俺の血で汚れた嘴くちばしが原因で断念することに。

だって前からは母鳥、後ろからは間男を見つけたような勢いで父鳥の嘴が炸裂するんだぞ？

全身から緑色の血を流しながら退散する以外に俺にどうしろと。

しかし、ただ負けて逃げるだけじゃ俺のプライドに傷がつく。もともあるか無いかもよく判らないものだけど。捨て台詞くらいはしてやろう。

フン。今回は見逃してやる。だが、覚えておくがい

い！光があるところには必ず闇があるものだ……。次は、次こそは必ずやゆで卵を……。あ、痛い。痛いって。マジ痛いから突っつくなよ。もう小屋から出てるじゃん。あ、イヤ、ちよっ、ごめんなさい。本当、ちよっと調子に乗ってたっていうか……。

再び全身から緑色の血を流す俺。鳥たちの容赦無い追撃は俺が柵から出て行くまで続けられた。

因みに全身の痛みが引くまで数分かった。いつぞやの熊の咬み傷が数秒で治ったことを考えると、その威力の高さが判る。

俺の戦略的撤退はベストな選択だったと言えるだろう。むしろあんな危険な場所に身一つで入っていった自分の勇気を褒めてやりたい。

それに親から子供を取り上げるのも可哀想だからな。今回は見送って数を増やすことから始めよう。……。別に、嘴が怖くて諦めたわけじゃないんだからなッ！

自己欺瞞ごいぎまんは完了。

うん。やっぱり妥当な判断だ。

誰にとも無く言うが、当然返事は無い。

さて、気を取り直して今日は魔法の練習でもしよう。ダンジョンは昨日で一応の完成はしたし。

上下10階層の、洞窟型ダンジョン。

内部に敵モンスターはいないが、構造が異常に入り組んでおり、ひたすら複雑で広大。宝箱等は一切無く徒労感だけが溜まるし、見取り図か、実際に掘った俺みたいに感覚で構造を覚えてないと、まず確実に迷う。

しかも、俺は最下層の大広間の天井裏に隠れてる。空が飛べるか、俺みたいに物理的に天井に空いた穴に届かない限り、入りようが無い。いや、それ以前に天井の穴に気付かない限り、見つかることも無いだろう。俺が隠れ次第、その穴の蓋も閉めるし。

そうして秘密の抜け穴から逃げ出した後は、洞窟の通風孔の前で生木に着火。勇者たちは内部に流れてくる煙の勢いに慌てて洞窟から逃げてくる・・・って寸法よ！

多少煙いかもしれんが、不法侵入者にそれだけで許す俺の寛容さに感謝するんだな！

・・・ふはははは！我ながらなんて完璧なプラン！

え？正々堂々と戦わないのかって？

勝てばいいんだ何使おうが勝ち残りゃあ！！世紀末兄弟の三男もそう言ってるし！

実際、死んでまで守りたいポリシーもないしな。

出来るとは思わないけど、殺すのも俺の精神衛生上、NOだし。

それに人間、生きててナンボでしょ。あ、お前触手だろっていう突っ込みはナシの方向で。

そろそろ今日も魔法の練習をしてみるかね。

18日目

珍しく、というのもアレだが、昨日の魔法の練習は全く進展が無かった。

成長現界に達したのかと思っただ、転生して一月と経たないうちに成長が止まるってどれだけ速成栽培なんだよ。

やり方が間違ってただけだと思いたい。

でないとこれから先、何回命が危なくなるのかも判らないのに、基本、戦闘に使える魔法が 殺るか kill 殺られるか or die だけのヤバいのオンリーになる。

出来ることならそれは避けたい。ガチで誰かとやりあうことになっても勝てないだろうし。

俺の基本はアウエー&アウエー。ともかく逃げて逃げて、相手が呆れるか諦めるくらい逃げ続ければ、怖い思いをする必要もないのさ！

下手に攻撃ヒットなんて考えてたら相手から痛い目に合わされるだけだしな！

とはいえ、現状逃げたり防御したりするのに適した魔法は覚えて無いから、どうにか習得したいもんだ。

そのための魔法の練習なんだが・・・、やっぱり今日も進展が無い。今までの経験上俺が強く何かを思うと、それに応じた魔法が出るみ

たいなんだが、さっぱり何も出てこない。

目ビームのときみたいにな、触手を的にしたりんごもどきに向けてるが、一向に何も出てこない。

たしかに何かが出そうな雰囲気はあるんだけど・・・。

うーん、強く考えても、『なんか出て来い!』じゃ具体性に欠けるのかな?」

イメージ、そうイメージすることが必要だ。ただ闇雲に命令するだけじゃ意味が無い。最強の自分を常にイメージしろ。赤い男前もそう言ってる。

出す?・・・出すためには何をする必要がある?魔法が出てこないっていうなら。

引っ張る・・・じゃない。

もぎ取る・・・でもない。

押し出す・・・・・・・・、これだ!

連想するイメージはところてん。あるものを後ろから押し出して形にする幻想。

出る、出る、出す、出れば、出るとき・・・！

そして俺の身体からは毎回唐突に出てくるあの光が・・・・・・・・・・
・あれ？

出てこないよ？いや、今一瞬だけ出たような気がしたんだけど、いままでみたいに長続きせずに、すぐに消えたみたい。

・・・ところてんが拙かったのか？やっぱり定番のかめはめ波の方がよかったのか？

そう考えてると、触手の様子が少しおかしいことに気付く。

なんていうか・・・、俺の触手は普段から粘液に覆われてて、ズルズルとしてるんだけど、それが10割→15割増しされたっていうか、もはや液を滴^{した}らせるレベルだな、これ。

もしかして・・・と思って垂れている液を木に擦^{なす}り付けるが、変化

はなし。

・・・エイリアン先輩みたく強酸性ってことはなさそうだ。

まあ、そうなるに逆に不便だったから良かったかもしれないけど・・・
・・・、ってちょっと待て。

ということは、まさかこの魔法？の効果は粘液の分泌を良くするだけ？

・・・え、マジで？

はああああああッ！！？

何の意味があるんだよ、それッ！？

効果は触手の見た目のキモさとズルズル感を向上させるだけ！

もしくは滑りをよくするんだろうけど、ドコでナニをするためなんだよ！？

さらに外見がもはやモザイクが必要な有様になってきてる。お茶の間に流したら確実に放送事故レベルだよ、これ。

助けを求めて羊漢たちを見るが、そろってこちらに尻をむけている。

ならばと正面に移動すると、今度は全員が他の方向に向きなあった。

……ツンデレなんだよな？信じていいんだよな？

最近段々自分で自分を騙してるような気がしてきてるけど、気のせいなんだよな！？

聞きたいけど、聞けない。俺は最後の最後には必ず安全牌を選ぶタイプだから。

世間ではヘタレと呼ばれるタイプですね、わかります。

今日はもう休みたい。全身ーションまみれだし。

目が覚めると、ーションまみれだった。

いや、魔法の効果が切れてないだけか。しかし、自分の身体ながら、気持ち悪い。

最低の目覚めだ。前世で寝ゲロしたときよりも精神的のくるものがある。

保温性なんかは高いみたいだけど液体でありながら、水とは違った粘性があるというか。

とりあえず身体の表面についている感触はあまり良いとはいいつらい。物を掴むときも、滑るから不便だし。

洗い流すために行水しようかとも思ったが、なんか川の水がやけに冷たいんだよな。

时期的なものか、場所的のものかは知らんけど。

風呂があればいいんだけど、無いしなゝ・・・・・・・・って、自分で造ればいいじゃん。

とりあえず今日は風呂を造ろう。

一番簡単なのは、やっぱり五右衛門風呂だろうか。土をいじって木で底蓋を作ればいいだけだしな。

そう考えて、まずは土の山を作り始める。直径1.5m、高さ1.5mくらいか。あんまり大きいと、燃やす薪が多くなるからね。

そうして山が完成したら、目ビームで軽くまわりを石化。それを裏返せば、俺が入ることが出来るくらい大きな鍋が完成だ。形は円柱に近い。あとは、その下に専用のかまどを作ると、やっぱり目ビームで壊れないようにコーティングする。

底蓋はその辺の木を倒して削り取ってきた。ドリル触手までーシヨンのせいで滑りそうになっていたのには参ったが。

風呂が完成すると、今度は水を入れてかまどに火をつける。

あらかじめ乾燥させてあったお陰か、いつかのキャンプファイアーみたいに煙が出過ぎることも無い。

しばらくして、中身がお湯になってきたら、風呂の縁を持ちながら、中に入る。少し熱い気もしたが、中々気持ちがいい。ーシヨンも

落ちてるみたいだし、造ってよかった。

そういえば、風呂に入るのも久しぶりだ。普段は粘液が表面についてるお陰で汚れも気にならないんだが、せっかく造ったんだし、これからは使っていくことにしよう。

やっぱり日本人は暖かい風呂じゃないとな。

景色も中々良いし、鼻歌も出てくる。

・・・実際に俺の喉から出てくるのは相変わらず珍妙な唸り声だったけど、そのときの気分は悪くはなかった。

20日

今日は果物がそろそろ少なくなってきたから、散歩がてら木のところまで取りに来てただけど・・・。

[illegible]

ሆኖታል፡፡ ሆኖታል፡፡

来た。来たよ。人間が来た。っていうか、待ち伏せされてた！

なんだよ、この超展開！？

いや、フラグは立ってたんだけどさ！

シリアスは無理だって言っただじゃん、俺！

どうする？どうしたらいい？追っ払うにしても、数が多い。むしろ逃げたいけどそれも出来ない。

10人で。なんでこんな弱小触手を相手に、そんな数をそろえてくるの！？前は4人だったのに！

それに、普通、パーティーは3〜4人だろ、常識的に考^レえて！！残りは馬車の中とかで待つてろよッ！

しかも、それぞれ弓矢とか短剣を持ってる。

ヤバイヤバイヤバイ。殺る気は満々だッ！

ダンジョンを使おうにも、今俺は果物を拾いに来てるから、無理だ。

逃げようにも囲まれてるし！

うわ。どうしよ、どうしよ、本当にどうしよ。汗まで出てきたよ。

触手が余計にズルズルになってきたし。また風呂に入らないと。

待て。テンパるな！考えろ。考えろ、マクガイバー！見たことないけど！

これは問題だ！この囲まれた状況から、どうやって逃げ出す？

3択 一つだけ選びなさい。

答え？（ある意味）ハンサムの触手Aは突如逃走のアイデアがひらめく。

答え？やっぱりツンデレだった羊漢や鳥達が来て助けてくれる。

答え？逃げられない。現実是非情である。

俺が をつきたいのは答え？だが期待は出来ない……。悲しくなってくるけど。涙とか出そうだけど。

しかも・・・、ああ。本当にアイディアが浮かばないし。

ここまでくるとテンパるのを乗り越えて若干冷静にすらなってきたよ。

うーん、俺がいる木を中心にして、10人が円を描くように配置されてる。

でも、全員が弓で俺を狙ってるってアリなのか？

外れたりしたら、仲間当たったりとかしないのかね？

ん？

あれ？よく見ると、こいつら、耳長くな？

いや、ファンタジー物のエルフほどじゃないんだけど、人間の耳を3cmくらい上に伸ばした感じっていうか。

まあ、それに気付いたからって現状、何の意味も無いんだけどね！

でも、どんな魔法を？失敗したら、まず死ぬぞ、俺！

「放てッ！」

リーダーの二度目の号令。そして放たれる矢。

ちょ、ま、せめて辞世の句くらい考えさせろよッ！

思わず目を閉じる。

今度生まれ変わったら、自転車のサドルになりたい……、
あ、男用だったら地獄だな、それ。

えーと、えーと、それじゃ、ブラとか。でも男用はカンベンな！

……ん？

なんか痛くないんだけど。

「馬、馬鹿な……！矢が効かないだとッ！」

リーダーがなんか焦ってる声。あれ、まだ俺生きてんの？

目を開けると、正面でリーダーの人がなんか驚いた顔をしてる。

その視線をたどると、自分の足元に落ちてる数本の矢が目に入った。

どれも鏃やっしには血がついてないから、身体の表面で止まったのか？

でもなんで？首を傾げるが、よく判らん。

そもそも見てた方もよく判らんみたいだし。

「クソッ！総員、退避ッッ！」

リーダーさんが怒りに顔を歪ませたまま、号令を下す。

周囲の奴らは何かブツブツと言ってたが、そのままそれぞれの方向に走っていった。

追っかけられても被害を最小限にする知恵かね。別に追っかけな

いけどさ。怖いし。

・・・っていうか、怖かった~~~~！

うわ、俺死にかけたよ！

マジでまた死んだかと思ったッ！

へたり込みそう。うわ~~~~、本当、助かったんだよね？

良かった。本当、生きてて良かった！

今日は・・・、今日はもう帰って寝よう。本当、疲れた。マジ死ぬかと思っただし。

6話　なんでこんなに努力してるんだ

21日目

目が覚めても正直、気分は憂鬱なままだった。

また全身が　ーションまみれだってこともあるかもしれないけど。

いや、生まれて初めて殺されかけたんだし、凹んだり不貞寝したりは普通のリアクションなんだろうけどな。せめて寝る前に風呂に入っておけばよかったか。

うん、まずは風呂に入ろう。気分転換、気分転換。

薪を持ってきた後は風呂の用意をして、中に浸かる。今度は適温くらいだったみたいだ。中々入り心地も良い。

ついでに羊漢たちを見て気を和ませよう。

今日もこいつらは草を食べてる。うっん。相変わらずこっちは向いてくれないけど、草食動物がいる長閑な風景はやっぱりなんか和むのとか。

半時間くらいそうしていると、気分もだいぶ落ち着いてきた。風呂から出て、触手を振って湯を切る。

俺は出来る子。今までやらなかっただけ。手加減してただけ。だって平和主義者だから。余計な争いってホラ、怖いじゃん。そう考えると、不思議と余裕が出てくる。

・・・なんて残念な精神構造をしてるんだろ、俺。

ともかく、気分もマシになってきたから、またダンジョンの拡張をしよう。昨日のことを思い出すと、段々不安になってきたし。

ん？・・・そうだ！ピンと来たぜ！

なにも同じダンジョンを拡張するだけじゃなくて、あの木のあたりにもダンジョンを作ればいいんだ！

そうすれば、もしここが攻略されたとしても、隠しておいたダンジョンが使える。

『切り札は先に見せるな、見せるならさらに奥の手を持て』って魔界3大妖怪も言ってたし、他にもいくつか造っておけば、何かの役に立つかもしれない。

そうと決まれば、さっそく実行だ！

今こそ呪われた過去を……、振り切るZ E！

とはいえ、昨日のように真正面から向かう愚は繰り返すわけにはいかん。っていうか、むしろまた待ち伏せされてそうで怖い。

自分の中のチキンさと冷静さが危険信号を出す、しかし行かないわけにはいかん！プロの目は誤魔化せんぞ！多分これは、選ばなかったら後の方でD E A D E N D 直行のフラグだ！

でも、危ないっていうのは事実だ。……そうだ！そういうときは発想を逆転させるんだ！

洞窟の外を歩くのが怖い？ジョジョ、それは無理やり行こうとするからだよ。逆に考えるんだ。「外に出るのが怖いなら、洞窟の中から行っちゃえばいいさ」と考えるんだ。

ありがとう、英国紳士！

でもなんか言ってることがまるつきり引きこもりッスね！俺が言う

ことじゃないけど！

脳内のナイスミドルに礼を言い、つるはしを持つと、洞窟の入り口に立つ。

それじゃあ中に入ろうかと思った瞬間、羊漢たちがこっちを見ている視線を感じた。もしかして心配してくれているんだろうか。

あいつらめ……。やっぱりツンで始まってデレで終わるアレじゃないか。

大丈夫だ。男は船で、女は港。俺はちゃんとお前たちのところに、帰ってくるさ……。

男らしく背中語り、振り返らないまま洞窟の中に入っていく。

だから、多分背後から聞こえた「ペッ！」っていうまるで唾を地面に吐き捨てるような音は聞き間違いなんだろう。

ええ。ちゃんと日が暮れる時間には小屋に戻しますから……。

微妙に精神的ダメージを受けたまま最下層まで歩いていくと、大広

間の隅、拡張工事をする時用に一箇所だけ他の壁と分けて石化させたところに立つ。

触手で石化した壁を取り外すと、土の地肌が出てきた。

そしてそこを触手に持ったつるはしで、打つべし！打つべし！

ザクザクと土を削りながら、果物の樹がある方向へと進んでいく。

一日で5階層を掘ってた俺のペースからすれば、よっぽど方角を間違えない限りただ通路を造るだけなら半日もあれば終わるだろう。

とりあえずどんなダンジョンを造るかは、向こうまで掘り進んだら考えよう。方向と樹の根でだいたいの位置は判るし、迷うことは無いでしょ。

さて、今日も頑張っていこう。程々に。

22日目

俺の朝は出来たてのホットミルクから始まる……。

食事の邪魔をしなければ羊漢も俺を蹴らないから、なんとかミルクだけは安定供給されてる。卵は、未だに放牧するときと戻るとき以外小屋に近付くと親鳥に睨まれるから無理だけど。

最近、っていうか最初からなんかコイツらの中で俺の扱いが悪いよ
うな気がするのは気のせいだろうか。なんか、ツンデレとかで片付
けられなくなってきたような気がするんだけど。

・・・気のせいだな。多分。おそらく。あるいは。・・・あんまり
考えないようにしておこう。それがお互いのためのような気がする。

気をとりなおして暖めた鍋から、コップに注いだそれを呑むと、独
特の風味と柔らかな味わいが口の中に広がった。

うん、前世で呑んだ牛乳よりもむしろ美味しく感じるな。

昨日は果物の樹までトンネルを掘った後、その根元近くに入り口を
持つ2階層のダンジョンを造った。因みに通路自体は判りにくいよ
うに石化させた蓋で閉じてその上に枯葉をかぶせてある。これで洞
窟の方の最下層にいきなり人間が現れることも無いだろう。

うはははは！近寄られなければ、テンパることも無いんだよお！

さて。今日もダンジョンの拡張をしよう。果物の樹の方のをさらに5階層くらい増設すれば、万が一あっちがばれたりしてもすぐには攻略出来ないだろうからそんなに心配もいらなし。

つるはしを持ってそっちまで移動すると、一応、入り口から誰もいないか確認をする。一昨日の二の舞にはなりたくないからね！

蓋を開けてぐるっと360度 よし、居ない。目に入ってきたのは、緑の草原と青い空、そして巨大な樹という長閑な風景だった。

弓矢とか剣みたいなの物騒なものは何処にも無い。・・・無いよな？
無いって言えよ。もし有ったら泣くよ？

ダンジョンは入り口から数十メートルは下にあるから多分バレることは無いだろうけど、不安は減らしておくに越したことは無いからね。

蓋を閉めてダンジョンに戻ると、最下層に下りてまたつるはしを振り始める。

なんかこっちの方が土が軟らかいみたいだから、洞窟よりも早く掘れるな。トンネル方式でやってるから、崩落の心配も無いし安全

に複雑な形で掘れるのも有り難いし。

調子に乗ってガリガリと削っていく。鉱石がほとんど無いのも、早くなっている理由の一つだな。もしかして洞窟の方にしか無いんだろうか？

色々と部屋を造ったりしながら進んでいくと、日暮れ前には8階層まで出来ていた。

しかも、洞窟よりもさらに複雑な構造になっているから、下手に下層まで入り込むと迷うことは間違いない。構造もブリキの迷宮並みに複雑にしてある。

これでもう、怖い思いをすることも無いだろう。っていうか、来るなら来てみる、コノヤロー！

・・・あ、いや、本当に来たりはしないでね？マジで困るから。死にたくないし。

マジでマジで。いや本当に。

怒ったなら謝るから。土下座どころか、五体投地くらいなら余裕でするから。

23日目

ふと気がついた。

俺がこの前武器を向けられたのって、外見が原因なんだよな？

っていうことは、俺の外見が人間っぽかったら襲われなかったかもしれないわけだ。少なくとも、まず武器を向ける前に俺が危険かどうかくらいは確認しようとするだろう。たとえば言葉が通じなくても、そのときに友好的な対応をしておけば、この前みたいに弓矢とかを向けられることもないんじゃないかな？

おお、ナイスアイデア！

・・・しかし、どうやって人間のフリをするのか？それが一番のネックだが・・・。

実はもう2つの解決案がある。

？魔法でやってみる。

？触手をどうにか纏めて頭と四肢を作り、人間っぽく振舞う。

・・・？は発案の段階から死相が出てるから、とりあえず？を頑張ってみよう。

しかし、今回の魔法は何かを出すようなイメージじゃないから、どうすればいいんだ・・・？

正直、今までと勝手が違いすぎてよく判らん。でもやってみるしかないか。

死にたくないし。

そして時間は昼過ぎ。

とりあえず、メタモンとかT-1000とかを参考に見てみたが、余計によく判らなくなってきただけだった。

だいたい、あいつら身体が液状だから、俺が参考にするにはちよつと違うっぽいしな。でも、触手から人間に姿に化けるキャラなんていたっけ？ワフェルダノスさんは微妙に違うし。

しかも、今までの魔法だったら、数時間も練習してると覚える前で

も多少のつかかりみたいなのがあったのに、今回はそれすらない。

今回こそ、駄目っばいかな。

真面目な話、今一番欲しい魔法なんだけどな。つつても望み薄なものにこだわるほど余裕も無いし。

うーん、それじゃ、？を試してみるか。

とはいえ、触手のままで人間っぽい格好か……。かなり無理がありそうな気がする。

とりあえず、触手を五つの束に分けて、それぞれを捻って一まとめにしてみる。

それを人間がそうするように2つの束で歩き、2つの束を手として動かせば遠目には人間に……。見えないね、コレ。

控え目に見てもヒトデが直立してるようにしか見えないな、これじゃ。しかも、触手が動くから気持ち悪さも増してるし。

・・・いや、諦めるな。諦めたらそこで試合終了だ。安西先生もそう言ってる。たしか、洞窟の中にボロボロがあつたはずだから、それを羽織って木を彫って造った仮面をつけたらどうだろう!?

藁にもすがる思いで木を削り、見る者に警戒心を持たせにくい笑顔の仮面を造ると、人間形態？の頭の部分の触手に持たせ、ボロ布で胴体にあたる部分を隠す。

よし、これで完成だ。

黒いボロ布に包まれた奇妙なほど細く背の高い身体に、関節のあるであろう場所を無視して蠢く腕と脚。異常なほど長い首の先にある顔は笑顔のまま固まっており、それは獲物を前にした昆虫のような無機質さを思わせる。さらに、顔の目や口からチクチ口と触手の先が出ていることも見逃せないだろう。

[illegible]

なんだよ！なんなんだよこれ！とところどころグロくしたカオナシかッ！？ジブリ作品が苦手な俺でも、さすがにコレは無いと思うぞ！？

これは無いと思うぞ！？大事なことになるので2回言いました！

こんなんがにこやかに近寄って来ても、命の危険しか感じんわ！ただの触手よりも人間の形に近い分余計にキモいし、なんか恐怖をおるし！

・・・あかん。これじゃ、触手系モンスターから謎の不気味なモンスターに変わったただけだ。どっちにしろ、人間には見えないから討伐される。

これじゃ拙いよな、と思いつながら視線を向けると、羊漢と鳥達が凄いいで視線を逸らした。ギョッ！って擬音がつきそうなくらい。もしかしてこっち見てた？

努めてこっちを見ないようにしてるから、なんか普段とは別の理由で避けられてるっぽいし。何故か一矢報いた気分だが、しかし意図してなかったことだからちよつとショックだ。

人間を目指してるのに、なんか真逆の方向に突っ走ってるような気がしてきたぞ？

・・・やっぱり絶望が俺のゴールなのか？

使い道を考えようにも正直今回はかりは無いとしか言いようがない。

うゝん、威嚇するときには効果的っぽいから、それには使えそうだけれど、ただの触手よりもさらに怖がられそうだな。怖がられるだけなら困らないんだけど、俺の場合、危険と判断されて駆除されることに直結するからな。

・・・とりあえず、保留ということにしておこう。

役に立つことがあるかもしれないけど、限りなくそうじゃなさそうだし。

another side 村長の日記（前書き）

今回、ネタ成分、コメディ成分がほぼゼロです。しかも自己記録を軽く塗り替えるくらい長くなってます。もっと上手く書きたいですね。

another side 村長の日記

ドミナの月、4番目のクロウの曜日

近く、世界を覆う凶星^{きようせい}が空に瞬くことになる。そして、世界は混沌のときを迎えるだろう。時に乗じ凶星に呼応するように数多の星々が地に堕ち、それと同じくして新たな禍星^{まがほし}が生まれることになる。だが、恐れることは無い。凶星と禍星はいずれ御子の手によって沈み、我らは安息を得る。ただ一つだけ、試練を乗り越えることが出来さえすれば。

先日ト占師^{ほくせん}のマーサが言っていた占い・・・、いや、予言がそれだ。

やや時代がかった言葉だし、肝心の部分がぼかされていて意味がよく判らない。

普通なら、例えば精霊術の素養があまり無い私などが言えば、それこそ失笑ものの話だが言ったのが他でもないマーサであったため、私はあまり気分の優れない日々を過ごしていた。

彼女の占いは、信憑性が高い。というよりは、まず的中する上にこの集落での一番の長老であるため、彼女の言葉には言外の重みがあるのだ。

ことに、この村の住人の大半の命の恩人であるとかれば、名目上はこの村を仕切っている村長とはいえ、無視は出来ない。それは、私とて例外ではないのだ。

だからこそ、彼女は普段黙して多くを語らないのかもしれないが。

ただ、それでもこの村にとって歓迎できないことが迫っていることだけは理解できた。一つだけとはいえ、それが将来村にとって影を落とすものであることは間違いないだろう。

事情を知らなければ私とて流れに身を任せるだけだっただろうが、生憎と私は村長だ。村の者の生活を守る義務がある。

それ以来、村の外で働いているものへの連絡や、付近の警戒等するべきことが加速度的に増えているが、それもいたしかた無いことだ。

私たちの現状を考えれば。

丸い世界の中、東の端に位置するアイオン王国のさらに東端。海岸よりは少々、山を三つ分ほど内陸に移動した場所に、私たちの村はある。

特産品は特に無し。村の中で作ったものは基本的に村の中で消費さ

れ、多少余ったり細工が上手い者が作った物を商人に買い取ってもらっている。近場の鉾山では魔法石が採れるらしいが、それも予言の中の『試練』を避けるための壕を村の者が山を掘ってみたら判ったことだ。恥ずかしながら、既にながい間この村で生活しているというのに私は知らなかった。

この村のことなら大抵は知っていると思っていたが、しかしそうでもなかったらしい。

少しばかり、そう考えて得意になっていた過去の自分が恥ずかしい子供にも言ったことがあるから、それもひとしおだったりする。

現在、掘り起こされた拳大の魔法石は商人に買取を依頼しているが、知人の話ではかなり高価なものらしい。

魔術師の生命線でもあるのだから、当たり前か。魔術の研鑽には才能と根気と、さらに大金が必要になるのは子供でも知っている事実だ。

魔法石も使用者の精神力や魔法を中に溜め込むという性質上、けっして安くは無い、むしろ高い値で売れることだろう。

年々赤字に近付いていく村の財政に頭を悩ませていた私としては喜ばしい限りだ。

だからこそ、私に今出来ることをしていかななくてはならないのだが。そう考えていた、そのときだった。

「村長！大変だッ！」

先日から壕を掘ってもらっていたエリオが突然ドアを開けて部屋に入ってきた。私はため息をついて水差しから水をグラスに注ぐと、息を切らせたままのエリオに持たせ、飲み干すのを待つ。

男性であることを差し引いても他の同胞に比べて大柄な彼は、しかしその顔を青ざめさせている。

まだ息を整えている段階で報告は聞いていないが、しかし来るべきものが来たか、という予感拭えない。そして、それは正解だった。

「……さっき、例の洞窟まで行ってたんだが、聞いてくれ。俺が掘った穴にモンスターが居やがったんだ……！」

良い知らせは中々無いものだが、悪い知らせはそれが義務であるかのように唐突に、しかし確実に現れるものだ。

とはいえ、苦々しい思いを持たずにはいられない。まだ万全とは程遠い対策しかとれていないし、すべきことも山ほどあるのだから。

「俺が洞窟に近付いたら、中から出てきて威嚇してきやがった・・・。触手っていうのか？なんか、モジャモジャした黒い毛玉みたいな奴だったよ・・・どうすりゃいいんだ？あいつがマーサが言ってた試練って奴なのか？」

それが『試練』そのものであるか、それともその一端でしかないのかは知りようが無いが、全くの無関係ということはありえないだろう。

そして、それに対する私の行動はいつもと変わりはない。

「・・・狩人たちにその洞窟を監視させるよう手配してくれるかしら。ただし、相手にけっして見つからないように細心の注意を払って。交戦はせずに、複数名で退路は常に用意した状態を維持して。」

敵になるのか、それとも潜在的なそれで終わるのかはわからないが、それでも危険であることは間違いない。モンスターと亜人や人間には狭くてとても深い溝があるのだから。

「ああ、判った。俺の方から当たってみよう。しかし、気持ち悪い見た目の奴だったな……。村長、何か知らねえのか？」

「・・・毛玉みたいって言ってたわね？だとしたら、ローパー種のモンスターだとは思うけど……。でもこんな内陸に住む種族なんて聞いたこと無いわね。」

海の近くを生息地としているローパー種は基本的に臆病で、人間や亜人が近寄ると逃げてしまわずだ。威嚇をするなど聞いたことも無い。

だが、私が知らないからといって存在がなくなるわけでもなく、現実としてモンスターは存在している。それも、私たちの生活圏近くを縄張りとして。

「それ以外に、何か判ったことは無かったかしら？」

「・・・いや、驚いてすぐに逃げてきちゃったから・・・、あ、そういやすぐに洞窟の中に戻ってたな。」

すぐに洞窟の中に戻った・・・？

逃げる獲物を追跡しなかったということだろうか？だとしたら、そ

れは何故だ？空腹ではなかった？あるいは威嚇だけに留める必要があった？それとも、何か・・・そう、追跡するには不適當な条件があったのか？

よく判らないが、憶測だけで決断を下せる段階でも無さそうだ。

「それじゃ、俺は狩人仲間を当たってみる。」

「ええ。頼んだわ。ただし、無理はしすぎないようにね。」

エリオが部屋を出た後、ため息をついて椅子に座り込む。来るべき時が来た。世界は今頃、混沌の時とやらを迎えているのだろうか。

辺境のこの村では試練一つでこのザマなのだ。その状況は想像も出ない。

『どんなに辛くても、明日は来るし私たちは生きている。世界は回るし太陽は西から昇ったりしない。生きている以上は死なない努力をしていかなければならない。』

古い友人の言葉だったが、しかし今の私の状況にはあっているのかもしれない。

さて。精々、自分と村の者たちが生きていけるように努力をしていこう。

アーボの月、1番目のヨグの曜日

先日から監視している件くだんのモンスターは、今日はトンネルを掘るのは止めたらしい。もしかして罫わくか、それとも産卵の場所を求めているのかと思ったが、違ったのだろうか。

穴は既に山を貫通しているそうなので既に十分な場所が確保出来ている可能性も捨てきれないが。

因みに、奇妙なことは他にもある。件のモンスターは毎朝決まった時間に洞窟から出てきて奇妙な踊りをしているらしい。

内容は毎回同じらしいが、触手を左右両側から振り廻すことにどういう意義があるのかは判らない。もしかしたらその種のモンスター特有の宗教にも似た何かなのだろうか。

それは特に珍しいものではなくコボルトやゴブリンといったモンスターにも同様に見受けられる特徴らしいが。

モンスターの信仰対象というのも興味を引く話題ではあるが、今はそんなことを考えている暇は無い。午前中、行商人が来たため採掘出来ていた魔法石を売却。それとなく情報交換をしつつ、精霊石をあるだけ購入する。

精霊石は文字通り精霊が多く宿る鉱石で、精霊術の使い手が9割以上を占める我が村では生活必需品の一部である。普段なら貯蓄の分と、次回までの繋ぎの分しか購入しないが、今はそうも言っていない。

幸い、魔法石に良い値段がついたので貨幣は出さずに済んだ。やはり隠れ里とはいえ何かあったときにモノを言うのは金銭だから、使わなくて済むならそれに越したことは無いだろう。

私たちは人間とは違うとはいえ、最終的にその社会に頼る必要が出てきた場合、金銭の力は大きい。

商人は私の買い物に少し驚いたような顔をしていたが、同胞からの連絡で近々なにかしらの異変がある可能性を示唆されたことを伝えると納得していた。

私たちの同胞はその生まれつきの資質の高さから様々な理由で世界中に居たりする。定住出来るような里はここ以外には無いが、だからこそ村を大切に思ってくれているのだろう。

尤も、異変を知らせてくれていたのは村の中にいるマーサだし、精霊石が必要なのは主に近隣に住み着いたモンスターのせいなので、商人に言った内容はほぼ嘘なのだが。

とはいえ、真相を知れば彼は金輪際この村には近付かないだろうし、そうなってくると物資が足りなくなってくるかもしれない。

彼等の危険と村の全滅の可能性を天秤にかけ、私は後者を取った。そのことに後悔は無い。それでも、今も笑顔で私に挨拶をしている人間の青年がもしモンスターに襲われたらと思うと、ぞっとしない。

まるっきり偽善なのだが、数世紀も生きていてまだ自分の役割に徹しきれていない成長の無さには少々自分でも驚かされる。勿論、悪い意味で。

一応、去り際に用心棒を雇うことを薦めたが、どれほど本気で取ってもらえたことやら。

商人が村を去った後、若衆に指示して精霊石を倉庫に運び込み、家に戻る。

書斎で図鑑を開きつつ狩人たちからもたらされたモンスターの形状や生態から正体を特定しようとするが中々見つからない。そもそも

ローパー種の項目は全て調べたが、それらしきモノは載っていない。

首を傾げながら娘が淹^いれてくれた紅茶に口をつけていると、正面のドアがズバンッ！と音を発^はてて開いた。

「
村長！大変だ！……ってどうしたんだい
？」

一週間前と同じくエリオが部屋に飛び込んできたが、紅茶が気管に入^むって噎^むせている私は答えることが出来ない。

というか本当に苦しい。そしてエリオは何故毎回慌てて入ってくるのか。

数分して息をようやく整えると、椅子に深く座り込む。紅茶を勧めたが、エリオは私に心配そうな表情を向けるだけで辞退した。余計なお世話だと言いたいが、そういう雰囲気でもないか。

おほん、と空咳をしてから改めて視線を向けるとエリオは再び深刻そうな顔をして口を開いた。

「例の奴を今朝から見晴らせてたシアラが怪我をしてな……。」

その言葉を聞いた瞬間、サツと自分の顔から血の気が失せていくのが判った。例の奴と言えば当然洞窟に住み着いたローパー種のことだ。

それに、シアラのこともよく知っている。下の娘と同世代の村の少女でとても仲が良かったはずだ。

見張っていたシアラが襲われたということは……。しかも、彼女は来月結婚する予定だったはずだ。自分の決定したことながら、痛ましい結果に目を覆いたくなってくる。

私たちは神に祈らないが、しかし運命を司る存在がいるというのは、何故我らにこうまで辛く当たるのだろうか。

「……それで、シアラの容態はどうなの？」

最悪、モンスターに殺されたか、捕まって今も慰みものにされているのか。前者ならまだ救いがあるが……。もし後者なら、一刻も早く彼女を助けなければならぬ。私の娘と同世代の彼女が生きていることに苦痛を感じる姿は、どうにも許容出来ないのだ。

だが、もしそれで余計な被害が増えることになったりしたら……。

「いや、腰が抜けたのと、後は木から落ちたときの打撲くらいか。例の奴が、魔術を使った後でいきなり叫んだらしくってな。驚いたそつだ。」

「捕まっただけじゃ、ないの？」

「そんな大事だったら、今頃村の衆を集めて助けに行ってるさ。」

私のきよとした問いに、エリオは苦笑しながら答えた。

それもそうか。どうにも例のモンスター絡みでは神経質になっていくらしい。楽天的に構えるのも拙いが、皆を纏める者が常時余裕が無くては不安にさせるだけだ。

よくよく自省すべきだな。

「……ってちょっと待って。魔術を使ったの？例の奴が？」

「ああ。岩を溶かすくらい強力な炎の魔術だったらしい。珍しいと言つべきか、何と言つべきかは判らんがね。」

この世界に現在も存在する奇跡の内の一つ、魔術を使用出来るモンスターもいないわけではない。むしろ、魔族と分類されるものは高確率で使用出来るし、中には他の奇跡である法術や精霊術を使いこなす個体も存在するらしい。

らしい、というのは、大抵そういうモンスターは強大な力を持っており、出会うことは死とイコールで繋がっているから、あくまで風説でしか知りようがないのだ。生息地自体が前人未到の魔境の類に位置することもそれを後押ししているのかもしれない。

つまり、例のモンスターはそういった類の一匹である可能性が出てきたわけだ。

「体制は指示した通りにしてくれていたのよね？」

「ああ。2人体制で一人が『気配隠し』、もう一人が『隠蔽』を使って監視に徹底させてたよ。シアラは『隠蔽』の方だ。相棒は例の奴が洞窟に戻ってからシアラを回収してきたらしいが……。」

シアラ一人だったから脅威をそれほど感じず、相手にもされなかったかもしれないので、その選択は正しいだろう。下手に脅威度が高いと思われたら、襲われていたところだ。

尤も、それは結果論でしかないし、そのままシアラが襲われていた

可能性だって同率かそれ以上にあったのだが。

「しかし、何故奴は監視に気付いたんだ・・・？」

「魔術には『感知』^{ディテクト}や『解析』^{アナライズ}みたいなものもあるわ。どんな切欠でそれに気付いたかは判らないけど・・・、相当用心深くて魔術が得意みたいね。」

あるいは索敵魔術すら使用せず、攻撃魔術を見て監視が起こした僅かなりアクション　息を吞む、身体を硬直させる、といったことでほんの僅か、普通なら見過ごしてしまうほどの変化を確認していたのだとしたら・・・。

それは、もう確実に私たちの手に負える相手ではないだろう。

ただの魔術を使うだけなら、正面から戦わなければ怖くない。たしかに強い。強いが、所詮モンスターの知能は一部の例外を除いて動物並みしかない。奇襲や罠、毒を使用すれば倒せるかもしれない。こちら側の犠牲を恐れなければ。だが、相手がその例外だとしたら・・・。

「ともかく、監視は一端引き上げさせて。警戒されている以上、現在の態勢では続行は不可能よ。」

「確かに、最初っから居ると疑われてたんじゃ、難しいことこの上ないわな……。」

「ええ。だから森の中にも感知結界を張って、ある程度の接近には気付けるようにしておいた方がいいかもしれないわね。それだけじゃ、結界をなんらかの方法で無効化される心配もあるから気休め程度かもしれないけど、村と洞窟の間をスリーマンセルで哨戒してもらえるかしら。」

「了解だ。早速、魔術を使える奴を当たってみるよ。」

エリオは言い、ドアを開けて出て行った。私はすっかりぬるくなった紅茶を飲むと、ため息をつく。

外部から冒険者が、退治屋を招聘するべきか……？

脳裏に考えが一瞬よぎるが、すぐにそれを否定する。

この村はあくまで最小限の人間にしか知られてはならないのだ。なにせ、他でもない人間から隠れるために作られた村なのだから。

とはいえ、半分は自分たちと同じ血を持つ種族だ。判りあえないこ

とはないかもしれないが……。私の一存で決めてしまうわけには
いかない。

それに、私とて人間の多くを知っているわけではない。偶々幸運が
続いて人格的に問題の無い者たちを知り合えてはいたが……。

村の何割かの同胞のように、好事家に買われそうになっていた過去
を持つものからすれば、人間とは化物の代名詞でもあるのだろっ。
そういった人間たちは、私たちのもう半分の血が伝えている容貌に
ひどく執心しているようだから。

そして、運よく招くことが出来たとしても、その人間たちが私たち
の村を知った上で放っておいてくれるとも限らない。窓口を別に設
けることが出来たとしても、この村の存在を知られたら同じことだ。

結局、その日は夕暮れまでうんうんと考え込んでいたが、最後まで
答えは出なかった。

アーボの月、1番目のカンの曜日

正直、自分の目が今も信じられない。

私は今、村の中心にある大通りに来ているのだが、そこから例の洞

窟のある方向を見ると、山の中腹から奇妙な、しかも驚くほど巨大な樹木が生えているのが判る。

私の周囲では驚いて樹を指差すもの、慌てて家に弓矢をとりに戻るものと落착着きの無い様相を呈しているが、実際のところそれは私も同じだ。呆然と立ち尽くしている状態で、次に何をするべきなのか、とりあえず皆と同じように大きな声を上げて驚けばいいのか、それとも避難の指示をするべきなのか。それすらも判らずに立ち尽くしている。

驚くにしても、既に驚いて大声を上げている者の近くで馬鹿みたいに同じように声を出すことは躊躇われたし、避難するにしても、あれが危険かどうかはまだ判らなかったからだ。

いや、あの樹が明らかに普通ではないことは簡単に判るのだが。

直感だが、例の忌々しいモンスターがやったのだろうと考えながら、これからどうするべきか考える。当然、調査が必要だ。あの樹が危険なものかそうでないか。そうだったとしたら、速やかに排除しなければならぬ。

無論、例の奴と同じように。場所から考えても当然無関係とは思えない。自分でやったのか、それとも仲間を呼んでやらせたのか。

どちらにせよ、縄張りを広げ始めたということか。

とはいえ、下手に刺激すれば一気にこの村に攻め込んでくることも考えられる。もし、あのモンスターが上級魔族だったりした日には、この村の全滅は免れないだろう。

それに、避難するにしても何処に？住み着いた洞窟以外にも壕は設けているが、未だに村全体がそこに移って生活が出来るほどではない。

頭の中で答えの出てこない問答をしていると、何かの音が聞こえた。徐々に近付いてくるその音は、すぐにその正体を現した。

それは西の空から、青い光を纏って現れた。おそらく、『移動』の魔術だ。以前見たことがあったから、かろうじて判る。ということ
は、あの光は人間か亜人、それとも魔族か。もしかしてあの樹を目
印として仲間を呼ぶ気だったのかと考えたが、しかし青い光は巨大
な樹木を通り過ぎ、私たちの頭上を通って海の方に飛んでいった。

・・・たまたまここを通っただけだったのか？なんて人騒がせな。

胸をなでおろすが、しかしそれで終わりではなかった。『移動』の
衝撃波によって巨大な樹木が大きく揺れたかと思うと、そこから青
い光が生まれ、流れ星のようにここからでは見えない方向に向かつ

て飛び去ったのだ！

視界で起こった異常事態を分析したいが、しかし慌ただしいこの場ではそれも難しい。

・・・とりあえず、家に戻らなくては。

ほとんど空白のままの思考でその答えを出すと、エリオを見つけたので事態の沈静化と後で家に来てもらえるよう伝えてよろよと移動する。エリオは二つ返事で了承してくれていた。

その姿はとても男らしく、格好が良かったので私が人妻じゃなければ惚れていたかもしれない。

そう伝えると、微妙な顔をされていたが。250過ぎのオバさんの冗談くらい、笑ってくれてもいいような気もするけど。

・・・どうにか家に戻ると、書斎に戻り、椅子に座ってからようやく息をつく。

置かれたままになっていた水差しからグラスに中身を注ぐと、イッキにそれをあおる。そろそろ、胃薬が必要になってくるかもしれないな、と誰にともなく言った。

ここのところ、ストレスを感じることが凄まじい勢いで増えている。今のところ、種族としての特性のお陰で私の見た目は人間でいうところの30代前半くらいだが、このペースでいくとそう遠くないうちに一気に老け込みそうだ。私とて女ではあるので、それに対する忌避感はあるが、さりとて現状がどうにもならないのだから受け入れるしかないのだろうか。

村の問題と自分の問題を同列に考えるのもどうかと思うが。

ともかく、外の樹木のことには思考を移す。いや、今のところ樹木は黙殺しよう。それよりも重要なものがあるのだから。

外で見た二つ目の『移動』^{ムーブメント}の魔術。あれは、魔術の光の起こった場所からしてあの樹木の上で唱えられたものだ。

そして、その樹木の近くには例の魔術を使用できる魔族が住み着いている。さすがに樹木の発生と『移動』の魔術はそれとは無関係だと根拠なく考えるほど、私はおめでたくない。

十中八九、なんらかの形で関与しているだろう。もしかしなくても主犯という形で。

しかし、それは更なる異常事態を告げるものでもある。『樹木の成長』なんてものは魔術の領域には無い。あそこまで巨大な樹木を作り出すのは法術の中にしか無いのだ。

神や他の何かに祈りを奉げることで、その力を奇跡という形で借り受ける法術。本来なら、高位の神官や一部の部族だけが使用できるものだが……。

そういえば、例の魔族は毎朝決まった時刻に奇妙な踊りをしているという報告を受けていたことを思い出す。

……迂闊^{うかつ}だった。想像できる材料は揃っていたというのに。手を^{まふた}瞼の上に当てて、天井を仰ぐ。きしりという音をたてて椅子が軋んだ。

だが、今はチャンスかもしれない。奴が『移動』で何処かに行っている今なら、棲家は誰もいないだろう。たしか、『移動』はかなり精神力を使用する魔術だったはずだから、戻ってくるにしても相應の時間が必要になってくるだろう。正直、戻ってきてほしくはないが。

今日……は流石に無理だから、明日一番に搜索隊を出そう。メンバーは……、エリオと後で相談しよう……。

アーボの月、2番目のウルの曜日

結果から言うと、搜索隊は失敗に終わった。順調に洞窟にたどり着き搜索を始めようとした瞬間、魔族が戻ってきたらしい。

もしかしたら、私たちを誘い込む罠だったかもしれないことを考えると、全員が無傷で帰ってこれたことは僥倖^{きやうしん}だったと言える。

搜索隊のメンバーはリーダーのエリオ、私の娘のアリア、村の若者のクルドとベリスだったが、念のために持っていた精霊石すら使用しなかったのには少し驚いた。

報告によると、魔族はその洞窟を自分の根城にしているらしい。外から見た洞窟はそのままだったが、その近くに小屋を作り、柵で仕切った場所にはモーレイス（羊もどき）を飼っていたんだとか。

こちらが神経をすり減らしているというのに、その悠々自適さはなんなんだろう。アリアから話を聞いているときはふつつと怒りが湧いてきたものだが。

ともかく、これで魔族が家畜を飼う程度には知能があることが証明された。それは、本能だけで生きるモンスターには到底不可能な芸当だ。

そして、エリオとアリアが洞窟の中を調べていると、何を考えているのか周囲の制止を無視したクルドがモーレイスを確保しようとしたんだとか。

正直それを聞いた瞬間、すぐさまクルドの家まで走って行って思いっきり彼を殴り倒したい衝動にかられたが、どうにか落ち着けた。クルドは年齢よりは若い、というか幼い精神の持ち主なので、多少気性が荒い部分があるが肉は美味く、皮や毛は衣類になり、乳も搾れる家畜としては最適なモーレイスを欲しがったのだろ。それを奪ったら魔族がこの村にどんな報復をしようとするか、全く考えもせずに。

そのことに関してはエリオがかなり叱責したらしいのでそれ以上私が言うことは無い。ともかく、それに気付いたベリスが制止を呼びかけるが、クルドは聞きもしない。声に気付いたアリアとエリオが表に出てきたが、後のまつりである。

当然ながら話はそれで終わりではない。間の悪いことに、クルドがモーレイスを袋に入れようとした瞬間、魔族が戻って着たのだ。魔族は威嚇をしながら戦闘態勢で接近してきたというので、4人はすぐさま逃げ帰ってきた。

事前に4人ともに相手の危険さをよくよく教え込んでいたお陰で、交戦しようなどという馬鹿を考える者も居なかったようだ。クルドもさすがに一人では敵^{かな}う相手だとは思わなかったのか、撤退には拒

否しなかったらしい。

モーレイスも置いてきたそうなので、報復を受けるかどうかは微妙なところだが・・・、埒の近くにいたことを見られているから、正直状況はよろしくないと言いたいようが無い。五分五分・・・いや、四分六分で襲ってくると考えておいたほうがいいだろう。

しばらくは監視よりも村の防備を充実させた方がいい。仮に襲ってこなければいいが、もし襲ってきたのに防備が出来ていなかったらどれだけの死傷者が出るのか。

そういえば、出稼ぎに出ている村の衆からそろそろ仕送りが来る頃だ。出来る限り、有用に使わせてもらうことにしよう。

さて。仕事が増えそうだし、頑張ろう。

アーボの月、三番目のヨグの曜日

私は暗澹たる思いで机に置かれた水晶球を見ていた。占い師などが持っていればサマになりそうな拳大のそれは、勿論ただの装飾品ではない。

”水鏡の水晶球”と呼ばれる魔術の一種、『付加魔術』エンチャントがどこさ

れた一品だ。

村の倉庫の片隅で埃を被っていた遺物が何故こんな場所にあるのか
というと、その効果に関する。

この水晶球は付属された小指の先ほどの水晶球と連動しており、そ
ちらに映った映像がこちらの水晶球に映されるという仕掛けなのだ。
初めてその存在を知ったときは正直、こんなものが何の役に立つの
か、と思ったが実際今役に立っているので人生とはよく判らないも
のだ。

役に立つ場面が来なければよかったのに、とも思うが。

今、小水晶を身につけているのは2人。アリアとクルドだ。そして
映された二つの視界の先、両方に醜悪な姿をした毛玉のようなモン
スターの姿が見える。

一見、そいつは追い詰められたかのように見える。だが、私にはそ
れで終わるような簡単な相手だとは思えない。ブラフだと言われれ
ば、すぐに納得してしまいそうだ。

さて。そもそも何故こんなことになっているのかを説明すると、昨
日、村の若衆が抗議に来たのだ。彼等の主張は単純明快。例のモン
スターを討伐する許可を出してほしい、というものだった。無駄な

血を流すことはないと私は説得を試みたが、しかし若衆、その中心人物となっていたクルドは聞き入れない。

とにかくモンスターを倒せばすべてが好転するとオウムのように繰り返すだけ。精霊術を付与した矢なら通じるはずだ、と。

絶望感から段々と目の前が暗くなってきた私を救ってくれたのは、意外にもアリアだった。彼女が若衆を取りまとめ、その指示に従えるのなら許可を出すと言ったのだ。

命がけであることは変わらないし、我が子までがそんな正気の沙汰とは思えない作戦に参加するなんてとんでもない！と叫びたかったが、衆人環視の中でそれを言うわけにはいかない。私は少なくともそのときは、公人として振舞わなければならなかったのだ。

でなければ、私の言うことの説得力など皆無になってしまっだろうし、そうなれば余計な混乱を招き、助けられる相手も助けられなくなってしまう。

だから、私からも条件をつけた。決して相手に有利な洞窟には入らず、罠を張って待ち構えること。そして、水晶球で私も現場が判るようにした上で、アリアの指示に従うことだ。

クルドは不満そうだったが、了承しなければ絶対に許可は出さない

ことを名言すると、渋々と頷いた。

他の若衆も私が必死に説得していたことで多少は危機感を持ったことも応じた理由の一つだろう。これ以上食い下がれば、仲間が降りてしまっだろうし。

そうしてアリアも加え都合10人になった若衆は、準備を整えた後出発した。

それから一睡も出来ずにずっと水晶を見守っているが、さっき毘を張っていた巨大樹のところにモンスターが来たらしい。

退路を塞ぎ、徐々に縮まっていく包囲の輪。全員が風の精霊の加護を受けた矢を使用しているから、ただの矢とは比べ物にならないほどの威力がある上、万が一外れても狙った相手以外には当たらない。それがかなりの至近距離から10本も放たれるのだ。普通なら死ぬだろう。

そう、普通なら。

若衆に囲まれた状態でモンスターの身体が一瞬だけ輝く。魔術か？と思ったが、しかしその光はすぐに消えた。後には何も変わっていないモンスターだけが残っている。魔術に失敗したのだろうか？

モンスターはただ、矢を放ってくるのを待っているだけだ。まるで、それが効かないことが判っているかのように。

「総員、構えッ！」

アリアが号令をかけ、それぞれの弓にこめられた力が跳ね上がる。
おそろくは、これほど精霊矢が放たればドワーフが作った全身板フルプレートメイル金鎧でも跡形も無くなるだろう。

鎧よりは柔らかいモンスターの身体なら、さらに比べるまでもない。

なのに何もせず、ただ獲物を見定めたようにアリアの方をじっと向いているのは、酷く気持ちが悪い。

「放てッ！」

アリアの言葉と同時にすべての矢が放たれ、精霊の光を纏いながらモンスターに近付いていく。

それに対し、モンスターは微動だにしない。まるで矢を何の問題とも思っていないかのように、正面から受け止めるつもりだろうか。

精霊術は直接的な攻撃力こそ魔術に一步譲るが、けっして侮れるものではない。むしろ、大の大人でも使い方を間違えればすぐに自分の命をおとってしまうような、危険な代物なのだ。

あまりにも杜撰すぎるその態度に、ようやく私は相手の罠を疑った。そして、それは正しかった。

「え？」

「馬、馬鹿な……！矢が効かないだとッ！」

矢がモンスターの身体の表面に触れた瞬間精霊の光を失い、そして勢いはそのままに方向だけを逸らされてばらばらと地面に落とされたのだ。

それを見ていた私の顔は真っ青になっていた。

デイスエンチャント
『解呪』！付加魔術や精霊付与の天敵の高等法術！

名前通り物に付与された魔術や精霊術を破壊する法術だ。……これで間違い無くなった。あの巨大な樹木を作ったのはこのモンスターだ。

2系統の奇跡を扱えるモンスター。それは、言葉で言えるほど簡単な相手ではない。むしろ、こんな田舎の若者が相手に出来るモンスターではないと言っべきだろう。

「クソッ！総員、退避ッッ！」

アリアの声が響くと、若衆は我先にそれぞれの背後に向かって走っていく。矢と同じく風の精霊の加護があるから、追いつかれて再び『解呪』をされない限り捕まることは無いだろう。

ただ、去り際にモンスターの身体が震えているのが気になった。

あれほど見事に若衆をあしらっておきながら、何を恐れているのか。最初はそう考えていたが、すぐに違うことに気付く。

あのモンスターは嗤^{わら}っていたのだ。自分を殺しに来ておきながら、傷一つも負わせることが出来ず、惨めに敗走するしかない私たちを。

心の底から侮蔑し、嘲笑していたのだろう。

私たちはこれからどうすればいいというのだろうか。私の問いに、答えてくれる者はいない。

7話　なんか毎日頑張ってる

24日目

我が輩は触手である。名前はまだ無い。

考えてみたら名前無いんだよね、俺。呼んでくれる相手も居ないから別に困らないんだけどさ。前世の名前もなんか半端に思い出せないし。転生系主人公（失笑）のデフォ設定ですか？

ま、判らんからいつまでも考えててもしょうが無いか。

どうせ俺、モブだし。あつたとしても、書類のお手本欄^{らん}とかみみたいな『触手太郎』レベルだろう。

人間、分不相応なことを考えるとロクなこと無いしね。

そういえばなんか今朝もラジオ体操してた時に流星が流れてた。かなり地面に近いところだったからそのうち洞窟の上に落ちてきそう
で怖いな。

つか、あれって本当に流星なのか？なんか、それにしては妙に大きかったような気がするんだけどな。

ま、いつか。考えても判んねえし。

今日は森の中を散歩することにする。最近、色々あったせいで働
きづめだったからね。リフレッシュリフレッシュ。

たまには自分にご褒美をあげないと。前世じゃ俺に最も遠い生き様
だった過労死をしちゃうからネ。

世の中、鞭むちばつかじゃ中々上手くいかないのさ！特に俺には、飴あめ9
鞭1くらいの割合じゃないと。

勿論、散歩にリスクが無いわけじゃない。でも、ここ数日ずっとダ
ンジョンを掘ってたり、洞窟の周りにいたから、急に外に出たとし
ても、罨を張ってることは無いだろう。・・・多分。

この前は囲まれたけど、今は草原じゃなくて森の中だから大丈夫だ
ろ。・・・多分。

段々怖くなってきたけど、いざとなったら木の上に移り移って逃げ
出そう。

そう決意して森の中を歩き始めて1時間ほど。

紅白色の猿(?)が現れた!

ふと視線を感じて振り返ると、なんか目の前の木の間から猿がこつち見てる。大きさは多分オランウータンくらいかな?全長が2メートルを超える今の俺から見ると、かなり小さい。

全身の毛は真っ白なんだけど、腹のあたりの毛だけ何故か鮮やかな赤い色をしてる。

変わった毛並みの猿だな。

なんか呆けたみたいにこつちを見てるし、仲間に苛められたんだろつか。最近俺がよく羊漢に蹴られたり鳥達に突っつかれたりした後、に浮かべる表情に似てるような気がする。

ああいうときは、一人で泣きなくなったりするんだよな。俺自身も割りと共感する部分があるので、見なかったことにした。

さっと方向転換してそそくさとその場を立ち去ることに。ん?今なんか光った?・・・気のせいだろ。多分。

あゝ、俺は何も見なかった。見なかったたら見なかった。つまり立ち止まっていない。Q.E.D. 違うつて？そこは無視してくれ。

突っ込み電波に脳内で返答していると、目の前で音がして何かが転がってくる。

石？なんで？

振り返ると、そこにはやっぱり白い猿が。なんか石を持ってるし、怒った顔でこつちを威嚇してるし。

なんだよ。見なかったことにして帰ろうとしてたじゃん。

あれか？恥ずかしいところを見た奴は生かしておけん的なリアクシヨン？傷つきやすいティーンの防衛策ですか？

無茶言うなつてもゝ。そんなに見られるのが嫌なら誰にもバレない場所で泣けつての。俺だってそうしてんだから。

そう思つてどうするべきか考えてると、また石が飛んできた。が、俺はクネクネと触手を動かして避ける。

うっっん、また動物に嫌われるスキルが遺憾無く発揮されてるみたいだ。普段ならここで一目散に逃げるところだが、しかし今回は違うぞ！

え、何故かって？相手が人間じゃないからさッ！武器も持ってないし、そもそも人間じゃないから怖くない！

・・・けっして、普段のストレスをぶつけてやれ、とか考えてるわけじゃないよ？ボク、紳士だし。攻撃もしないし。

ただ、身にかかる火の粉は自分で払うっただけさ！そうですよね、
ライメンマン
拉麺男先輩！

俺がやる気になったのが判ったのか、猿はいつそう激しい勢いで投石してくるが、身体にはかすりもしない。

見えるぞおおッ！俺にも敵が見えるッ！いや、別に俺が凄いいんじやなくて触手ボデーの反射神経が凄いだけなんだろうけどさ。

ともかく石の軌道が見るだけで判るから、そこから逃げるだけで済む。

ふははははは！こんなスローボールなら表面まですぐに読めるぞ！
たちはな
橘さん式特訓も簡単だッ！

猿は次々と石が避けられるのに業を煮やしたのか、それとも俺の余裕が気に入らなかったのか今度は自分で襲いかかって来た。

引つ掻くつもりか！だが、そうはさせん！

俺はより触手をクネクネヌルヌル動かすだけで、猿の爪攻撃をかわしていく。当然、掴まれたりもしない。

これぞ、秘奥義『KYOUSUIガード』！！見えない超能力だつて至近距離からかわしちゃったりする回避技なのさッ！派生技の『フライング二丁目固め』まではしないがな！

そのまましばらく攻撃を続けていたが、しかし一向に当たらないまま猿は根負けした。

荒い息をついてへたり込むと、そのまま前のめりに倒れる。

WINNER！！・・・ってあれ？

なんか、ドクドク赤いのが倒れたままの猿の腹のあたりから地面に染みこんでるような気がするの、気のせいかな？気のせいだよネ？尋ねるが、猿は苦しそうな息をしたまま起き上がる様子は無い。

反対に、赤い染みは地面に広がっていく。

お前の血は何色だぁぁッ！

緑色ですが、何か？

落ち着け、落ち着け。素数を、素数を数えて・・・、あれ？素数ってなんだっけ？自分の頭の悪さが憎い！

もしかしくなくても、これって俺のせいかな？でも、俺は攻撃を避けてただけなのに・・・。っていうか、ああ、なんか意識が・・・。

血を見たせいで貧血になりそうになるが、どうにか踏みとどまる。気絶から目を覚ましたら死体とご対面とかカンベンだし。

う~~~~~~~~ん・・・、とりあえず、洞窟に連れて行くか。

・・・正直放っておきたいけど、そうしたらどうなったのか

絶対気になるし。もし何もしないで死んだりしたら、絶対後悔しなくなるしな。

しかし、血が触手につく感触が嫌で何回か猿を落としそうになったのは秘密だ。

25日目

猿の看病ってどうやったらいいのか判らないから、とりあえず果物の搾り汁と羊漢のミルクを飲ませて栄養と水分の補給をして、紐と茹でて消毒したボロ布で傷を縛り、止血する。

好きなドラマは仁 J I N でしたッ！

因みにこれだけだとテキパキと応急処置が出来てたように聞こえるけど、実際は血を見たせいで途中で数回テンパったり気絶しそうになったりしてた。

しかもそんなに努力したのに、なんかまた新しい魔法で傷が治ったってのが一番の残念ポイントだな。

けっこうザックリいつてる傷だったから、素人医学でどうするべきか悩んでたら、いつも通り光った後、見る見るうちに傷が消えてい

くし。正直、見ててキモかった。

っていうか、さ。

俺だって別に努力が好きってわけじゃねえんだよおおおッ！むしろ嫌いだよ！だからどうせ魔法が使えるなら、一通り治療が終わった後じゃなくて最初からにしてくれよお！

けっこうイツパイイツパイになってんだからさあ。いい加減にしないと泣くぞコラ！

・・・ともかく、猿は一命を取り留めたっばいが、不思議なことに体力が底をついてるせいでまだ意識を取り戻さない。血は相当量流れてたとはいえ、何故ここまで体力を失ってるんだろ。

とりあえず、俺とは無関係な事柄でそうなったことは語るまでも無いだろう。・・・多分。おそらく。

眠っている猿は多少苦しそうな顔をしているが、それでも倒れた時に比べれば顔色はかなり良い。順調に回復してるんだろ。

さすがは野生動物。

しかし、いつまでも猿って呼ぶのは可哀想だ。名前を決めてやるか。

うーん。猿モネラ・・・は止めとこう。病原菌扱いは地味にこたえるしな・・・、経験上。

花中島マサル・・・も話が通じなさそうだな。悩むな。様式美的には突飛なものにはしたくないし。

うーん。猿、SARU、エテ、モンキー・・・・・・・・。モンキー！？

そうだ、ジョジョにしよう！お前はモンキーなんだよ、ジョジョッ！

うん、黄金の精神を持ってそんな良い名前じゃないか！

思いつきに自画自賛しつつ、ボロ布と鳥達から抜け落ちた羽毛で作った布団をジョジョに掛けてやる。

洞窟の中は俺には適温だが、元怪我人・・・怪我猿には多少冷えるかもしれないしな。

ふう。

そういえば、ジョジョはなんであんなトコで重傷を負ってたんだろ？うーん、右手ならカースを疑う所だが、怪我があったのは腹だしな。

けっこう深かったから、ナイフ傷でもなさそうだし……。よく考えてみると人間以外にもヤバい動物がいるのなら、俺自身も対策が必要だしね。

うーん、まずこの洞窟に扉をつけようか。作るの自体は枠と扉を粘土で作った後、石化させればいいだけだからそう難しくないし。

仮にそれ以外の必要が出てきてもジョジョが目覚ませば判ることだしね。

そのためには早く目を覚ましてもらわないと。そうだ、今度は山菜のスープを飲ませてやることにしよう。

自分の昼食と一緒に作れるから俺も楽し。

26日目

ジョジョはまだ目を覚まさない。今朝には目を覚ますと思ってたんだけど、アテが外れたっぽい。

てか、昨日洞窟に扉を作ったんだけど、一つ困ったことが出てきた。扉を閉めると洞窟内がほぼ完全に暗闇になるから、それでも見える俺以外は動くことも難しくなってくるんだよね。まあ元々夜になったら暗闇なんだけど。

一昨日までならそれでも良かったんだけど、今はジョジョがいるし、こいつが襲ってきた相手をも助けるといふ征服王並の俺の力リスマにひれ伏してツンデレハーレム入りをするなら、かなり不便になってくる。

うーん、通風孔を設置してるとはいえほとんど締め切った洞窟の中で火を使ったりしたら、すぐに酸素で DEAD OR ALIVE だ。酸素欠乏症にはなりたくないッス。

でも燃やせるものなんて、松明くらいだし……。

うーん。とりあえず、燭台しょくだいでも作ってみるか。それに一番良い魔法が使えるようになるかもしれないし。

正直、俺が使える火の魔法は妙に威力の調節が難しいし。

しかし、どうやって作る？いつも通り粘土を捏ねて石化してもいいんだが、それだとよっぽど上手く作らないと火の光が遮られちゃうしな〜。

素人が作ることを考えると、正直難しそうだ。

火で燃えたりしない変形できる素材で、欲を言えば透明なものって・
・・・・あ！

そっぴゃあ、あのよく判らん鉱石があつたっけ！

数だけは馬鹿みたいにあるから、アレを使って燭台を作ろう！

眠ったままのジョジョに朝食を飲ませた後、小部屋から鉱石を一個持ち出すと、洞窟の外に出る。

ドリルの音は多少響くからネ。俺は紳士だからさっさと配慮もできるのさ！凄いで紳士！田舎っぺが目指すだけはある！そこに痺れる憧れるう！

そうして数十分すると、俺の目の前には丸い皿の中心に刺がついた透明の燭台が完成していた。

うん、中々の出来だ。蠟燭か油さえあればそのまま使えるんだけど・
・・。

うゝゝん、動物の脂を絞るのは無理だし、やっぱ魔法に頼るしかないか。樹液には燃料になるものがあるって聞いたことがあるけど、それらしいのはこのあたりには無いしな。

うん、それじゃあ魔法にチャレンジしてみようか。

1時間後。

小さい火、小さい火・・・・あかん。全く反応が無い。というか、変身する魔法が無いが試したときみたいに全くとっかかりが無い。

・・・それなら、火じゃなくて光そのものとかはどうだ？魔法を使うとき、なんか毎回俺の身体から出てくるし。

それに、なんかその方が高等な魔法っぽいし。

よし、再チャレンジだ。

光、光、光、光、光……うゝん、なんか出てきそうだけど、こりゃ時間がかかりそうだ。

元々あった火の魔法を調節できるように訓練した方が早いかな？

既に2ブツダフェイスを消費してるから、三回目の正直だぜ！

結果、燭台が萌えました。……じゃなくて、燃えませんでした。

ゴオオオオオオオツ！って音を発てて燭台全体が燃えてる。それを見た瞬間、へたり込みそうになった。3ブツダフェイスが……。空海なら確実にキレてるところだぞ、これ。

また燭台を作り直すのか……。いや、そもそも使える魔法が無いんだったら、作っても意味が無いし……。

触手を腕組みして悩んでみるが、結論は出ない。

ジヨジヨには外付けの小屋で我慢してもらっしかないか……。最終的にそう決め、ふと燭台を見ると火が消えてた。

しかも、あれだけ火であぶられたのに燭台は全く溶けてないし、なんか内側から光ってるし。

・・・意味ワカンネ。なんぞコレ？

あれか？飛行石？

でも俺、名前の最後がウル・ラピユタになったりしてないだろうしな。

そもそもこの石、っていうか燭台、飛んでないし。

とりあえず持ち上げてみると、ほんのりと暖かい。うっっん、もしかしてホッカイロ？いや、光らせる必要ないだろ、それ。

あ、もしかしてこれってパワーストーンか？俺の魔法を吸収したの？本物だったら実にヤバそうだけど。

主に鬼畜ジジイとか改造大好き帝国に目をつけられる意味で。

でも、本物だったらこんなにゴロゴロあるわけないから、類似品だ
る。多分。てかそうであって欲しい。

うーん、とりあえず本当に魔法を吸収するのか試してみるか。

そう考えて削りだしておいた手のひら大の鉱石に、とりあえず目
印を当ててみる。

数秒後そこにあったのは、燭台とは別の色に光る石だった。

・・・間違い無いっぽいな。とりあえず、この石はホツカイロと照
明に使うことにしよう。

うん、数はかなりあったからジョジョの部屋を洞窟に作っても大丈
夫だろうし。

タナボタ的な問題解決にまた若干の不満はあったが、とりあえずは
良いことにする。というか考えるのが面倒臭くなってきたし。

よし、（非性的な意味で）暖めてやるからな！待ってるよ、ジョジ
ヨ！

8話 平和に暮らしてるだけだと思ってみてる

27日目

そうだ、フィギュア作ろう！

さっき京都行こうくらいのノリで思いついたのはそれだった。

唐突すぎる？だって洞窟が前も中も殺風景なのが気になってきたんだもの。仕方無いじゃん。

同じ三次元でも生身じゃなければ問題無いし、インテリアとしても（俺が）楽しいものだし。誰に理解されなくても俺の気持ちは渡辺流星さんなら判ってくれるはずだ。あれほどの猛者なら確実に・・・。

それに、まだジョジョは眠ったままだしダンジョンの拡張も終わってるから他にすべきことも無いし、構わないだろ。

なんかそう考えたら、自然と頭の中にワイヤーフレームっぽいものが浮かんできたわけなんだが、なんぞコレ？

いつの間に正義の味方スキルを手に入れたんだろうか？

・・・ま、いつか。解析じゃなくて設計みたいだから違うつばいし。この程度でアタフタしてたら、触手になった時点で完全に人生が『詰み』になってただろうし。

ものは試しでとりあえず、洞窟の外で土をこねて小山を作って石化させると、それを設計図ワイヤフレーム通りにドリルで削っていく。

考えてみれば俺って彫刻とか初めてだったはずんだけど、不思議と触手が動くな。しかも、設計図通りに一分の狂いもなく。

あれか。眠ってた才能が開花したってことか？この前狙われた弓矢が実は隕石で出来てたのかもしれないね。

王には王の、料理人には料理人の適材適所があるなら、俺のはコレなんだろうか。前世じゃ知らんままだったけどさ。

まずは大雑把にポーズを決めて削ると、そこで次にどうするか考えてみる。

うっっん。とりあえず、モデルはこの前見た調教ゲーのヒロインっぽい美人さんにしよう。怒られると嫌だから、顔は多少変えるけど。

そこで、鎧を着て、剣を構えさせてみたらどうだろ？

そこまで考えると、また頭の中により詳細になった設計図が浮かぶ。うん、便利だこれ。

彫刻するのは最初から彫るべき形が素材の中で決まってるのサツ！
歴史上の偉人もそんなことを言ってたような気がする。

そうして1時間もすると、完成。タイトルは『勇ましく前を見つめた重装甲の女戦士』だッ！・・・ビキニアーマーじゃないところは単純にイモ引いただけです。

どっちかっていうと、そっちの方が良かったんだけど・・・。とりあえず、髪をクルクル巻かせたのが精一杯でした。

しかし、1/1フィギュアの原型を作る手間としては、ありえないくらい短時間だな。しかも、完成度もかなり高い。今にも動き出しそうな生命感？だか躍動感だかあるっぽいし。

じつとフィギュアを見てみると、なんだか心の奥が暖かくなってきたような気がする。そう、この気持ち、まさしく愛だッ！

ふふ。他にもアイディアは『ひざまず 跪き懸命に祈る女僧侶』とか『杖を持った魔女』『冷たい目をした魔族の女』なんかもあるぜ！

・・・とりあえず、全部作ろう。

材料はいくらでもあるし。ホラ、あって困るモンでもないし。

誰に言っているのかよく判らない言い訳をすると、俺は再び作業の手を動かせ始めた。

28日目

洞窟の外が1日で随分にぎやかになったが、今日はどんなフィギュアを作ろうかと考えていると、ジョジョが目を覚ました。

それはいいんだけどなんかやたらと怒ってるように見えるのは気のせいだろうか？

思い当たる部分が無いでもないので、とりあえずコンタクトを取ってみるべきか？

・・・けっして忘れてたわけじゃ無いヨ？ただ、今朝はご飯一人分だけしか作らなかったし、俺もお腹空いてたし。

弁明しようとするが、問答無用！と言わんばかりの勢いでジヨジヨが俺に飛び掛ってくる。俺は洞窟の中だったせいで、逃げることも出来ずに、体当たりを食らう。

そこまで怒るほど空腹だったんだろうか。

しかし、うう、痛い。なんでこんな元気なんだよ。まさか波紋で回復してやがったのか？

しかも、それだけでは飽き足らず、ジヨジヨは俺の触手に噛み付いてくる。

だ、大丈夫だ。俺には固有スキル：カリスマAがあるはず。

ほら、怖くない。怖くない。ほらね、怖くない。

ねっ？^{おひ}怯えていただけなんだよね？ウフッウフフ。

・・・うん。だからさあ、いい加減痛いから。痛いし血も出てきて

るから。離してくれよ。

風の谷の姫っぽく言ってみたが、ジヨジヨの噛む力は弱まらない。
むしろ強まってる。そろそろ肉が噛み千切られそうだ。

痛い痛い痛い！マジ痛いって！助けてユパ様ア

ッ！

しかしモヒカンは近くにいなかった！

本日の教訓：ペットにはリードをちゃんと着けましょう。

考えてみると色々とヤバい状況だが、段々ムカついてくる。なんであんなに治療してたのに、一回ご飯忘れたくらいでここまでされるんだ？

俺はあんたの母ちゃんですかッ？チャーハン作れなきゃ用無しですかッ！？

意味不明な怒りと共に噛まれていた触手をフルスイングすると、ビタン、と音をたててジヨジヨを振り落とす。

うわ、痛そうな音。痛みが消えたことで素になるが、既にジヨジヨ

は壁にぶつかつた後だからあとのまつりだ。

しかも一瞬目を回していたようだったが、すぐに起き上がる。そうして、今のうちに逃げるべきかどうかを考えてる俺の傍に今度はのそのそと歩いて近付いてきた。

どうするつもりだ、と考えているとジヨジヨは今度はさっきまで嚙んでいた触手の傷を舐めている。

・・・・・・・・・・もしかして、コレはアレか？

敵対的だった奴が、頭を強く打ったことで一転して友好的になるっていう・・・・、伝説の、カカロット症候群かッ！

まあ、こいつも猿だし共通する部分もあったかもしれないな。

とりあえず触手を舐め終わったジヨジヨを身体の上に乗せると、洞窟の外に出る。

ジヨジヨは不思議そうに昨日作った12体のフィギュアやら羊羹たちを見ていたので、桶から水を鍋に注ぐと、もう一回料理を作り始めた。

山菜のスープが出来ると、お椀^{わん}によそって渡す。最初はそれを見てきよとんとしていたが、俺が触手であるジェスチャーをすると恐る恐る食べ始めた。

空腹もあつたのか、すぐに1人前食べてしまつと日向で寝転がる。うーん、自由な奴だな。

爺さんの方の孫悟飯さんもこんな気分だったんだろうか。

とりあえず、今日はフィギュア造りは止めておこう。作業に熱中しすぎて放置したせいでまた噛み付かれたらかなわんし。

機嫌を取っておいた方がいいのかね？

洞窟の中の保存庫から紅バナナを取つてくると、ジョジョに渡してやる。ジョジョが不思議そうにそれを見ていたので、仕方無しに俺が食べ方を実演。毒が無いことが判ると、遠慮無しに食べ始めた。

やっぱ猿にはバナナがいいのか、次から次へと食べている。

このペースで食べられると、すぐにまた取りにいかないといけなくなりそうだ。面倒くさいので、本人に取りにいかせようかな。

そんなことを考えながらジヨジヨの隣で寝転がる。まだ日が高い時間帯だから、草のベッドも寝心地が良い。

幸い、と言つべきかジヨジヨは羊漢たちとは違ってツンデレじゃないみたいだから、俺の言うことも聞いてくれるだろう。多分。恐らく。

そうしてひとまずジヨジヨに話しかけようと横を向くと、そこには白い猿はいない。

あるえ？

いつの間に？と首を捻っていると、「ウキヤアッ！」と声が聞こえる。

ああ、物珍しくてその辺を見てたのか、と思つて振り返ると、そこには地獄絵図があつた。

……ジヨジヨさん、柵の中で両手に一匹ずつ鳥の脚を持つて逆様にぶら下げてるのはなんでですかネ？あと、羊漢の背に乗つて猛烈なスピードで走らせてるのは何故なんでしょうかね？

さらにその手前に見える砕けた石の塊は、なんなんだろうネ？

俺にはさっぱり理解できないヨ？

・・・もしかして俺の力作の成れの果てなのか？あはははは。まさかな。そんなことはあるはずが無いよな。うん、無い無い。ジヨジヨがいきなりそんなことする理由が無いもん。

とはいえ、とりあえず自分を落ち着かせる意味でフィギュアの数一数えてみよう。ええと、1 2 3・・・9。

・・・おかしいナ。12体あったはずのフィギュアが、なんか9体までしか数えられないよ？

ああ、そうか。屋気楼か。俺は幻を見てるんだね。そうだね。そうに決まってる。・・・段々自分を誤魔化すのが難しくなってきたから、そろそろ現実を見るべきだろうか。

羊漢や鳥の悲鳴も聞こえるし、見たほうがいいのかもしいな。

とはいえ。それには、まず精神的苦行を行う必要があるんだけど。

ああ、ヤダなあと思いながら視線をむけると、やっぱりそこには粉々にされた石像・・・いや、フィギュアがあった。

・・・なんじゃこりやああああああッ！！？俺の『フィギュア』が『フィギュアだったもの』にいいいい！！！！

ジーパン刑事^{デカ}の最期並に衝撃を受けているんだが、しかし下手人はまだ柵の向こう側を爆走してる。つーかあの短時間で3体も壊したのかよッ！

うゝうゝうゝ、あんまりだ・・・HEEEYYYYY！あんまりだアアア！

俺はあまりのショックに腕を切断された壁の男みたい慟哭するが、当然ジョジョは気づかない。

野郎・・・！

何の恨みがあつてアスタロット（女魔族）とミント（女僧侶）とデイファ（女格闘家）に手を出しやがったああああッ！？

怒りの化身と化してジョジョを追い始めると、奴は俺に遊んでもらっていると思つたのか、鳥と羊漢は放したものの、今度は柵の外に逃げていく。

待てやゴルアアアアアアアア！

貴様はッ！やってはならんことをしたのだということを！たつぷりと教育してやるうううううッ！

完全に頭に血が昇った俺と、ジョジョとのチエイスは実^{追いかけて}に1時間に及んだ。

脚の速さは俺の方が上のはずだが、木を使って三次元的に逃げられるせいで、中々捕まえられなかったことが、そこまで長引いた原因だろう。病み上がりでここまで逃げる事が出来るジョジョが凄いのもあるんだろうけど。

どうにかジョジョを捕まえると、次はどんな遊びをするのかキラキラした目でこちらを見ている破壊魔を、どうやって恐怖に染め上げるか思考する。

カベルナリアか、あるいはタランチュラか、それともロメロスペシヤルか。

考え込んでいると、ふと何かの音が聞こえた。この森に俺たち以外に何かいたっけ？と思って振り返るが、色々と遅かった。

「だからさ、アリアの奴最近生意気だからさ、一回痛い目を・・・」
「止めとけて。お前この前もそんなこと言って洒落シヤレにならないことになりかけたんだからさ・・・。」

「ベリスに同感だね。今そんなことをしてる余裕があると思ってる時点でクルドは状況を見る目がないと思うよ。」

ぱきり、と木の枝を踏み折って出てきたのは、金髪イケメンの3人組だった。タイプもそれぞれ正統派とクール系、シヨタ風と分かれているし、こんな場所で何をしてるんだろう？

何故が見てるだけで呪詛が浮かんでくる見た目のそいつらは、俺の方を見て口をパクパクと開けている。

それに対する俺は突然ここまで人が近付いた緊張のせいで、動くことが出来ない。コミュ能力が低い者にとって5メートル以内に他人がいるという事実辛い。かなり辛い。

新聞勧誘には毎回居留守を使ってた俺のメンタルの弱さを舐めないでもらいたいねッ！正直、今すぐ逃げたいがこんな時に限ってガチガチになった触手は動かないし。

てかどうする？どうする？下手すりゃここで殺されるぞッ！！？

考える、考える。・・・いや、前回それでどうにもならなかったし。それに、先人もこう言ってる。「Don't think FEE L（考えるな、感じるんだ）」って。そのアドバイスに従って現状を感じてみる。相手は3人。こっちは非戦闘員の俺とジョジョ。うん、無理。QED。

結局何も変わらないまま、緊張感だけが大きくなっていく。

「・・・どうするリーダー？とりあえず俺は逃げに一票。」

「武器はほとんど無いんですから、戦うんならリーダーだけでどうぞ。僕も逃げに一票。」

「おい、お前らッ！・・・オレを置いてくなよ！多数決だからなッ！仕方無いからな！」

何かを早口で相談した後、3人はそれぞれの方角に走り去っていく。

なんだったんだろ、あれ？はぐれメタルごっこ？

ジョジョの方を見てみるが、奴はアメリカ人並みのリアクションで肩をすくめただけだった。なんかリアクションがやけに人間くさい奴だな。

とりあえず、お仕置きとかの気分じゃなくなったし今日はもう帰る

うか。

そう考えてジヨジヨを身体の上に乗せると、俺は洞窟に帰ることにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4130x/>

触手モノ

2011年11月14日12時48分発行